

---

## 副社長 北条明良

立花祐子

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

副社長 北条明良

### 【Nコード】

N93310

### 【作者名】

立花祐子

### 【あらすじ】

アイドル「北条明良」の結婚から引退後までのお話です。新婚なので、ラブラブなシーンもありますが、許してやって下さい（笑）  
他サイトにも投稿しています。

## 出逢い

女優の香月菜々子<sup>かづき</sup>は撮影を終え、外へ出た。

（あー…嫌だった…）

今日のベッドシーンの撮影を思い出すとぞっとする。好きでもない男性に、たとえ演技とはいえ抱かれるのは、やはりいい気分じゃない。

『よかったよー、菜々子ちゃん。』

相手の男優に言われて、菜々子は背中に寒気が走るのを感じた。でも仕事を選ぶほど売れてはいない。

女性のマネージャーが車を出して、待っていてくれた。

「お疲れ様です。」

「お疲れ様。ありがとう。」

菜々子はそう言って、車に乗った。

……

菜々子は、車の中から、夜の景色を見ていた。

「明日は久しぶりのお休みですねえ。」

車を運転しながら、マネージャーが言った。

「ええ。ゆつくり寝れるわ。」

「それがいいです。昼も夜もなかったですもんね。」

「マネージャーもお疲れ様。」

「いえいえ。」

ふと通り過ぎた景色に、見たことのある横顔がさつと目に映った。  
橋の上で、川を眺めている。

「マネージャー、止めて！」

「は？あ、はい。」

マネージャーもその人物を見て、車を止めた。

菜々子は車を降りて、外へ出た。思わず気温の低さに肩をすくめた。  
何か歌が聞こえたような気がした。

「明良さん！」

菜々子は、川を眺めている北条明良きたじょうに声をかけた。その瞬間（やだ。  
どうして下の名前で呼んだのかしら…）と思った。

明良は振り返った。とたんに、驚いた目ではらく固まったように  
菜々子を見ていたが、

「…菜々子さん。」

と言って、微笑んだ。

菜々子は、明良に近づきながら言った。

「どうして、こんなところに…。お独りですか？」

「ええ…。」

「こんな寒い日に、どうされたんです？」

「…考え事…ちょっといろいろとありまして。」  
「そう…。」

声をかけたものの、どうしてわざわざ明良に声をかけたのか、自分で不思議に思った。

「あの…今、私家に帰るんですが、一緒に車に乗りませんか？家までお送りします。」

「ああ…それはどうも…でも、僕の家はすぐ近くなんですよ。」

「え？ああ、そうでしたか…。」

「お気遣いいただいてすいません。」

「いえ…そんなこと…。」

菜々子はそう言って、その場を去ろうとしたが、やはり明良をここに独りで置いておけないような気がした。

「あの…明良さん、お茶でも一緒にいかがですか？」

明良は目を見開いて菜々子を見た。

……

夜とはいえ、喫茶店は大騒ぎになった。

そりゃそうだ。アイドル（といっても、もう30近いが）の北条明良と女優の香月菜々子がそろって入ってきたのだから。

マネージャーには、悪いが帰ってもらうことにした。しかし彼女も早めに仕事が終わってほつとしただろう。

「うーん…私はミルクティーで。明良さんは？」

「じゃあ…僕も同じものを。」

2人がそう注文すると、ウェイターは顔を赤くしながら頭を下げて、その場を去った。

「…もう11時過ぎてたんだ…」

明良が時計を見ながら言った。

「そうですね。」

菜々子がそう答えると、明良は眉に皺を寄せて言った。

「こんな時間まで撮影ですか？」

「まだ早い方ですわ。」

「女性をこんな遅くまで働かせるなんて…」

明良がそう言った時、さっきのウェイターがミルクティーを2つ持ってきた。

「ありがとう。」

菜々子がそういうと、ウェイターは真っ赤になった。

……

明良と菜々子はミルクティーをそれぞれ一口飲んだ。

「あー…あつたまりますね。」

明良のその言葉に、菜々子はふと思い出した。

「そうそう…明良さん、どうしてあんな寒いところにいたんですか？」

明良は苦笑した。

「家で考え事をすると、悪い方に考えがいつちやうんですよ…。だからいつも外で考え事をするんです。特に、川の流れを見ながら考えていると…まず気持ちが落ち着くんですよね。」

「…そうなんですか…」

「変な男でしょう？」

「いえ、そんな！…考え事と言うのは悩み事ですか？」

「…ええ…」

明良の顔が少し翳った。菜々子は（だから、なんとなくほっとけなかつたんだ）と自分の感に自分で感心した。

「…そのお話お聞きしたいけど…ここでは無理ですね。」

明良はその菜々子の言葉に、ふと辺りを見渡して笑った。

「ええ。ここではちよつとね。」

「あの…女の方から厚かましいとは思いますが…連絡先…教えてくださいいただけます？」

「え？」

明良が驚いた表情をした。菜々子は顔が火照るのを感じた。

「…ごめんなさい。」

「いえ…違うんです。…まさか…大女優さんにそんなこと言っても

らえるとは思わなくて。」

「大女優なんかじゃありません。」

「僕には大女優さんですよ。…そもそもこうしてお茶に誘っていただけだけでも、緊張するのに。」

菜々子は（そんな風には見えないけど）と思ったが、これは口に出さなかった。

結局その日、2人は赤外線通信を使って、連絡先を交換した。

…

翌日、昼過ぎに明良からメールが来ていた。

『昨日は楽しかったです。ありがとうございます。』

その1行だけだった。

菜々子は「こちらこそ」と件名に入れてから、「私でよければ、昨日の考え事、教えて下さい。」と本文に入れ、返信した。どうしても明良の悩みが気になるのだ。そして、すぐに返信が返ってきた。

『今夜も会いませんか？』

菜々子は胸がはずむを感じた。

『どこか、ゆっくり話せるところで。…でも、どこがいいかな。』

「そうねえ…」

菜々子も困惑した。自分の家はいくらなんでも1度しか会っていない



いのに、招待するわけにもいかないだろう。

『個室があるバーを知っているのですが、そこでいかがですか？』

大胆かなあと思いながらも、菜々子は返信してみた。するとまたすぐに返事が返ってきた。

『それは是非。』

菜々子は思わず声を上げて喜んだ自分に気がついた。

（やだ、いい年をして…）

そう思いながら、会う時間を打ち合わせた。

「明良さんも、お休みなのかな…」

それならすぐにでも会いたい気分だが、高鳴る気持ちを必死に抑えた。

「そつだ。何を着て行こう!！」

菜々子は、鼻歌を歌いながら、クローゼットを開いた。

……

「北条さんはもうお越しになっていますよ。」

バーのマスターが、菜々子にそつと耳打ちしてくれた。菜々子がよく独りになりたい時に来る場所だった。マスターは口が堅く、安心

して飲める場所だった。

「ありがとう。」

「お飲み物は何を持っていきましようか？」

「明良さんは何を飲んでるの？」

「オレンジジュースです。」

「じゃあ、私もそれで。」

「わかりました。」

菜々子は個室のカーテンを開いた。

「ごめんなさい。私の方が遅くなってしまっ…。」

そう言うと、明良が顔を上げ立ちあがった。スーツを着ていた。ネクタイはなかったが、何か昨日のラフな雰囲気と違ったので、菜々子はどきりとした。

「いえ…。なんだか気持ちがはやって…。早めに着いてしまいました。」

「まあ、お上手。」

「そんなことはないですよ。」

明良が照れくさそうに言った。2人は座った。

よく考えてみれば、菜々子は明良のことを、テレビや新聞でしか知らなかった。明良もそのはずなのに、どうして昨日は、まるで知り合いに会ったように、お互い名前で呼びかけたのだろう…。

マスターがオレンジジュースを持ってきた。菜々子は「ありがとう」と言った。

「あれ？」

明良が不思議そうな顔をした。

「それはカクテルですか？」

「いえ…ただのオレンジジュースです。」

「…もしかして…僕が飲めないから？」

菜々子は、ためらいがちにうなずいた。

「それは申し訳ないな。…どうぞ、お好きなの飲んでください。その方が、僕は気が楽です。」

「…すいません。」

「あ、いや…謝ってもらうことは…これは私が飲みますから、どうぞ好きなものを。」

明良にそう言われ、菜々子はマスターにいつもの赤ワインをお願いした。

マスターがうなずいて、カーテンを閉めて出て行った。

すぐにでも明良から話を聞きたいが、マスターがワインを持ってくるまでできない。

いつもより、時間がゆっくり過ぎているような気がした。

明良は、先に来た飲み物すら一切口をつけていなかった。今も一緒にワインを待っている。

「どうぞ、先に飲んでください。」

「いえ。待ちますよ。」

「逆に気を遣います。」

「あはは…やり返されましたね。」

明良が笑った。菜々子は「そんなつもりじゃ」と下を向いた。その時、ちょうどワインが来た。

「グラスワインなんですか？」

明良が不思議そうに尋ねた。

「すぐなくなっちゃうじゃないですか。」

「ワインは一気に飲むものじゃないので、大丈夫です。」

「あ、なるほど。」

2人は乾杯した。

(どうしよう…)

と菜々子は思った。いきなり悩み事を聞くのもはしたない様な気がする。

「今日は、お仕事お休みだったんですか？」

「ええ。菜々子さんも？」

「はい。久しぶりに。」

「！…そうですか…その久しぶりのお休みの時間を取ってしまつて申し訳ない。」

「そんな…いいんです。私もちょっとむしゃくしゃすることがあつて。」

菜々子は思わずそう言つて「やだ」と言つて、下を向いた。

「…先に聞いてもいいですか？」

明良が少し心配そうに言った。

「だめです。今日は明良さんのお話を聞きに来たんですから。」

「じゃあ、僕から話したら話してもらえますか？」

「ええ…話します。」

「僕のは…大したことじゃないんですよ。」

明良は指でこめかみを掻いて言った。

「お仕事のこと？」

「ええ。…体の限界を感じてて…。」

明良はダンスを主流とした歌手である。最初はアイドルでデビューしたが、どんどん歌唱力をつけ、今はダンスのある曲よりも、バライドの方が多かった。

（そのことで悩んでるのかしら）

菜々子はそう思ったが、明良の次の言葉を待った。

「引退を考えているんです。」

「引退!？」

明良は自分の唇に人差し指をあてて「内緒ですよ」と言った。

「それはもちろん…でも、引退なんて早すぎます。」

明良は首を振った。そしてオレンジジュースを一口飲んだ。

「歌はまだいけそうですが…踊ることはもう…前に自分がテレビで

踊っているのを見て、情けなくなりました。」

明良の顔に陰りが帯び始めた。本気で悩んでいるらしい。

「私は明良さんの踊る姿、好きですけど…。」

「僕の踊りを見たことがあるんですか？」

「ありますとも。でも、全て見てるわけではないですけど…。」

「そりゃ、そうですね。…でも、1度でも見てもらえたなら、うれしいです。」

「逆に1度も見たことがない人の方がいないんじゃないやありません？」

明良はくすつと笑った。「そう言ってもらえるとうれしいけど」と  
呟くように言った。

「とにかく引退はまだ早いと思います。個人的な気持ちですけど。」

菜々子がそう言うと、明良は真顔のままオレンジジュースを一口飲んだ。

「…相澤さんでしたっけ？親友の…相談されたんですか？」

「先輩にですか…。まだです。」

「親友でしょう？一番に相談しそうなもんですけど…。」

「そうですね。…でも、こういうことは何故か親友でも言えないんですよ。」

「そうなんですか…。」

菜々子には理解できなかった。そもそも親友などいないが。

「まず相澤さんに相談されてから、もう1度考えたらいいかですか？…私…結局お役に立てなくて申し訳ないですけど…」

「いえ…独りで考え込んでいたから、口に出したことですっきりしたような気がします。」

明良がそう言って微笑んだ。菜々子はどきりとした。さっきの翳りのある顔から笑顔の差が大きい。

「じゃ、今度は菜々子さんのお話。」

「え？もう？」

「ええ、僕はもう解決しましたよ。」

「！」

（なんだか、拍子抜けだわ）と思ったが、約束は約束だ。

「…とても言いにくい話なんですけど…」

「…なんででしょう？」

「…昨日、実は撮影でベッドシーンがあって…」

「！…」

明良の目が見開かれた。菜々子は恥ずかしさに顔が赤くなった。

「やっぱり…やめます。」

「いえ、駄目です。…それで？」

「…いえ…ただ、嫌なんです。ああいうの…。女優は皆そう思っていると思いますけど…。好きでもない人に、演技とは言え素肌を触れられるのが…嫌で…」

明良はただ黙って、菜々子を見つめている。さっきよりも機嫌が悪くなったような表情になった。そして腹立たしげに、オレンジジュースを飲んだように見えた。

「ごめんなさい！…こんな話…」

「いえ…菜々子さんが謝ることはないですよ。…僕の悩みなんか…全然比べものにならない…」

「そんなことはありません。」

明良は首を振った。

「ワインがなくなっていますね。どうぞ。」

「あ、すみません…」

菜々子はちよつとほつとして、マスターを呼んだ。マスターはすぐにワインを持ってきてくれた。

菜々子はすぐにワインを飲んだ。何か気まずい。明良は何も言わないで下を向いている。

「ごめんなさい…」

明良がふいに口を開いた。笑顔はない。

菜々子は明良が何を謝ったのか分からず、顔を上げた。

「…僕…女優さんって…仕事を楽しんでおられるのかと思っていました。」

「…え？」

「僕は、歌うのが好きで、踊るのが好きで…この道に入りました。…皆、楽しんで仕事をしているものだと思ってた…。もちろん僕たちだって嫌な事はあるけれど…あなたの今おっしゃったことに比べれば、まだましだ…。」

「明良さん…明良さんがそんなに深く考えなくていいですよ。…仕方がないんです。仕事だから。」



「彼氏は？」

「え？」

菜々子はぎくりとした。

「彼氏は？なんておっしゃってるんですか？」

（彼氏がいたら、2人で会わなければならない…）と思ったが、菜々子は平静を装って答えた。

「いません。」

「え？…うそでしょう？」

「いたら、明良さんと2人で会いません。」

結局口に出してしまった。明良は、はっとしたような顔をした。

「…そっいゃ、そうですね…。」

「明良さんは？彼女は？」

菜々子は聞き返してみた。もしかすると、いるのかもしれない。

「もちろん、いませんが…」

「うそ！」

「いえ、本当です。」

明良が困っているのが分かった。ワインが回ってきたこともあって、菜々子は気が大きくなっていた。

「…本当のことを教えて。」

「本当にいませんよ。…困ったな…」

明良はオレンジジュースを飲んだ。もうグラスが2つとも空になっている。

「ジュースまだいります?」

「え?…ええ…すいません。」

ジュースが来るまで一時休戦状態になった。何故か、菜々子是不機嫌になっていた。自分でもよくわからない。

オレンジジュースが来た。明良はすぐに一口飲んだ。菜々子は下を向いた。…涙が溢れ出てきた。

「!菜々子さん?」

「…ごめんなさい…実は私…泣き上戸なんです。それだけですから…」

本当の話だった。

明良がそつと手を伸ばして、手のひらを上に向けた。

「?」

菜々子がその手を涙越しに見ていると、明良が「手を」と言った。

菜々子はそつと手を出し、明良の手に自分の手を乗せた。

明良がそつと握った。

菜々子の目に、再び涙が溢れ出てきた。

「僕は…あなたのその悩みに何もしてやれません。…でも…僕でよ

かったら、辛い時にこうして会いましょう。会ってお互い嫌な事を話して…。こうして手を握ることくらいしかできないけど…。」  
「…充分です。」

菜々子が泣きながら言った。明良がほっとしたように微笑んだ。

……

結局、この店の代金は、明良に押し切られる形で払ってもらった。実は昨日の喫茶店でも払ってもらっている。

「昨日も私から誘ったのに…すみません。」

店を出てから、菜々子は頭を下げた。

「いえ…あなたと会えてよかった。」

明良が笑顔で言った。そして、ポケットから車のキーを取り出した。

「家までお送りしましょう。」

「え？」

考えてみれば、明良はアルコールを飲んでいない。

明良は「あ、いや。」と頭を掻いた。

「家の近くまで…です。家の場所…知られたくないですよね。」  
「そんな…別に構いませんけど…じゃあ、送っていただきます。」

明良が微笑んで、自然に菜々子の背に手を添えた。だが菜々子はびつくりしてしまった。

「あ、そうか…：すいません…：触られるの嫌でしたね。車の場所があったなんて…」

「違うんです。…：突然だったから…：。」

明良は笑って、駐車場に向かった。キーのボタンを押して、車の口ツクをはずした。

黒っぽい車だが、詳しくない菜々子には車種がわからなかった。

「どうぞ」

助手席のドアを開いて、明良が言った。

「ありがとう。」

菜々子が乗った。

明良はドアを閉めると、さっとあたりを見渡して、運転席に乗った。

……

車では、菜々子の家まで30分程だった。

（もうお別れなんだ。）

少しさびしい気がした。

（ここで、家に誘ったら…：はしたないかな…：）

菜々子はずっと悩んでいた。このまま帰りたくなかった。

だが、菜々子の気持ちを無視して、時間は過ぎていく。  
あつという間に、家についたような気がする。

とりあえず、マンションの地下駐車場の来客用のところに明良の車を止めてもらった。

「どうも…ありがとうございました。」

菜々子が言った。

「いえ…またメールします。」

「ええ…私からも…」

「じゃ、おやすみなさい。」

「…おやすみなさい。」

ためらいがちに車を降りて、そつとドアを閉めた。

すると明良が、運転席から降りた。

「!？」

明良は「マンションに入られるまで見送ります。」と微笑んだ。

「…え？」

「あのドアまで遠いですからね。その間にあなたに何かあったらいけない。」

「…それなら…」

菜々子は意を決して言った。

「…部屋まで、守ってください。」

明良の目が見開かれたが、すぐに微笑んだ。

「…信用して下さっているのなら。」

「もちろん…信用します。」

「では、お部屋の前まで…。」

明良はそう言っただけで運転席のドアを閉じると、車のロックをかけた。

……

翌日 -

相澤がメッセージャーの向こうで笑っていた。

「そりゃ、菜々子さんも災難だったね。」

明良は頭を抱えている。

「恥ずかしいったら、もう…」

明良は昨日、思わぬことで香月菜々子の家に行ったことを相澤に話していた。

しかし、部屋の前で帰るつもりだったのが、結局、菜々子に腕を引っ張られるようにして、入ってしまった。

問題はその後だった。

玄関で、ほぼ酔っぱらった菜々子にキスをされ、倒れてしまった。

明良は、菜々子のキスで酔っぱらってしまったのである。菜々子はグラスワインを4、5杯は飲んでいたように思う。

そのままアルコールを飲んだわけではないので、さすがに急性アル

コール中毒にはならなかったが…

とにかく、救急車を呼ぼうとした菜々子を必死に止めて、ソファーを貸してくれと言った。

そして「寝室に」と言われたが必死に断り、ソファーに倒れこんだ。目が覚めると、菜々子が自分の胸の上に頭を乗せて、寝ていたという。

「目が覚めて、どうしたんだよ。」

「…いや…菜々子さんが僕の胸の上に頭を乗せていたから…動くわけにも行かなくて…起きるまで待ってました。」

「…手を出さなかった？」

明良は咳払いをした。

「…いや…その…寝顔があまりに綺麗で…。ついキスを…したら目を覚ましてしまっただけ…」

相澤は笑った。

「で、どうした？」

「とにかく謝りましたよ。向こうも謝っていたけど…。でも恥ずかしくて、そのまま飛び出してきてしまったんです。」

「え！？そのまま帰っちゃったの!？」

相澤が驚いて言った。

（俺だったら、そのままやっちゃってるな…）

などと思ったが、それは口に出さなかった。

「…だから、どうしようかと…。こっちから電話しにくくて…でも  
…お礼くらい言わなきゃとは思っただけですけど…」

明良が頭を抱えているのを見て、相澤は笑った。

「でも、いいなあ…。香月菜々子さんか…。清纯派女優が、そこま  
で大胆になるってのはなかなかないよ。」

「…からかわないで下さいよ…。もう…どうしたらいいのか…」

明良のその動揺ぶりに、相澤は苦笑した。

「そうだなあ…。とにかく電話して…」

と相澤が言った時、明良の携帯が鳴った。

「！-！-」

明良は、頭を上げて、携帯を見た。

「！-！-…菜々子さん…！」

「おっ！出る出る！パソコン消すなよ！」

「あっちで話します。」

そう言つて、明良はヘッドフォンをはずし、携帯を持ったまま立ち  
あがった。

「おーい！！ここで話せて！！そっち行くなー！」

ヘッドフォンから相澤の声が漏れている。



明良は気にせず、部屋を出て、電話に出た。

「もしもし…」

「明良さん？…よかった…電話取ってくれて…」

「今朝はその…すいませんでした。」

「いえ、私の方が…先に酔っぱらっちゃって…あんなこと…」  
「…呆れたでしょう？」

明良がそう言うと、菜々子は何も言わなかった。

（やっぱり呆れたんだ…）

明良はそう思い、ソファーに座りこんだ。

「それはこちらの方です…。はしたない女だと思ったでしょう？」  
「そんな！…そんなことはないですよ！…むしろ…嬉しかったというか…なんというか…」

「…本当に？」

「…はい…本当です。」

「じゃあ…今夜も家に来て下さいますか？」

「えっ！？」

明良は思わず立ちあがっていた。

「…いいんですか？」

「ええ…もうお酒は飲まないですから。」

「…いえ…そんな…」

「飲まなくても、明良さんが来てくれたらそれで…」

その後が続かないようである。明良も顔が熱くなるのを感じていた。

・・・

「で？」

ほったらかされていた相澤が、少し不機嫌に明良に聞いた。

「行くのかよ。」

「…行くと言いましたが…。行ってもいいものかどうか…」  
「？どうして？」

「…自分の理性をどれだけ抑えられるか自信がないんです。」  
「！…」

「…きっと、何かがはずれてしまうと思うんですよ。」

明良は顔を片手で伏せて悩んでいる。

「それなら、今のうちにお断りして…」

「ばか——————っ！！」

相澤が突然大声を出した。明良はびっくりして、ヘッドフォンを取り去り、立ちあがって両耳を抑えた。

「先輩っ！！…鼓膜が破れたらどうするんですっ！！」

カメラの向こうで、相澤が両手を合わせて謝っている。  
明良は頭を振って、ヘッドフォンをつけ直した。

「あのな…明良…」

相澤は静かに言った。

「女性の方から家に来てくれているのは、ほぼ100%OKなことだよ。」

「…そうでしょうか…」

「嫌だったら、呼ばねえよ。」

「でも、それとこれとは…」

「それもこれも何のことかわからないけどさ。」

相澤がとぼけて言った。

「お前が、例えば何かが壊れて、菜々子さんを襲ったとする…な？」  
「…はい…」

明良は片手を目で覆っている。

「その時、菜々子さんにけとばされるか、投げ飛ばされるか、ドロップキックを受けるか、牢固めされるか、コブラツイスト…」

「先輩先輩！」

「ん？」

「全部、想像しちゃいますから、プロレス技はやめて下さい。」

「あー…ごめん。とにかく抵抗されてから、ちゃんと謝って身を引いたらいい。今回はほぼ100%それはないと思うけどな。」

「………」

「菜々子さんが、何も抵抗しなければ、そのまま流れに任せて進んだらいいんだ。」

「…!…」

なるほど…と明良は思った。やはり相澤は経験豊富だ。

「家に誘われているのにこっちから断るなんて、菜々子さんに一番失礼にあたるんだぞ。」

「…わかりました…」

「それから！花束持っていけ。」

「花束？」

「手ぶらで行くなよ。薔薇の花束を持って行くんだ。古典的な方法だけど、嫌がる女性はまずいないから。」

「あ、は、はい。」

「自分で買っただぞ。マネージャーに買いに行かせたりするなよ。」

「あ、その方法があった。」

「…また怒鳴られたいか？」

「いえ！！…いいです。」

相澤がくすくすと笑っている。

「あの北条明良が恥をしのんで、薔薇の花を自分で買って持ってきてくれるんだぞ。そんなうれしいことはない。」

「…先輩、女心もわかるんですね。」

「わかりますとも。」

裏声で、相澤が言った。

「じゃ、成功を祈る。がんばりたまえ。帰ってから必ず報告するよ  
うに。以上！！」

相澤はそう言っ、勝手にメッセージを切ってしまった。

「え？ちよつと先輩！！」

相澤のメッセージは、オフラインになってしまった。パソコン

の電源を切ってしまったらしい。  
早く準備をしるということだろう。

「あー…こんなに緊張するの初めてだ…。」

明良は独りでそう呟いた。

……

明良と菜々子はソファーに並んで座り、食後のコーヒーを飲んで  
いた。

「お料理、お上手ですね。」

「お口に合って良かった…。」

明良の言葉に、菜々子はほっとして言った。明良は、菜々子の手料  
理を残さず食べてくれた。体つきから見ても、さほど食べない様と思  
ったのだが…。

明良が持ってきた薔薇の花束は、早速花瓶に入れて、ダイニングテ  
ーブルに置いている。

…玄関を開けた時、薔薇の花束を持った明良の姿を見て、菜々子は  
驚いた。

「…その…お詫びです。」

照れ臭そうに、そう言いながら花束を差し出す明良の姿に、菜々子  
は自分の首筋まで赤くなっているのがわかった。

……

「普段は…コンビニ弁当で…」

明良が頭を掻いた。

「！明良さんが、コンビニに行くんですか？」

「ええ…そりや行きますよ。」

「大騒ぎになりません？」

「なりませんよ。逆に気付いてくれる人の方が少ない。」

「そんなこと…」

菜々子は驚いた。

「…本当です。…ほとんど忘れられていると思いますよ。」

「…うそ…」

信じない菜々子に、明良は苦笑した。

「…だから、川を見ている時に、あなたが私の名前を呼んでくれた時は…嬉しかった…」

「！…」

「まるで知り合いのように呼びかけてくださいましたね。」

「明良さんだつて…」

「菜々子さんは毎日のようにテレビで見ていたから…そりゃ、あなたのことはわかりますよ。」

菜々子は首を振った。

「僕が引退を考えたのは、それもあつたんです。このまま業界から消えてしまふのかな…」と漠然と思っていました。それもいいけど、

はつきり引退という形を取った方がいいのか…とか…」

「歌が聞こえたような気がするんですけど…歌ってました？」

「え？聞こえていたんですか？…小声で歌っていたつもりなんだけどな…」

「風に乗って、少しだけ…。悲しい歌のように聞こえましたけど…」  
「！…」

明良はソファーにもたれて、苦笑した。

「明良さんの歌？」

「いえ…この歌知りませんか？」

そう言って明良は歌いだした。

スメタナの「モルダウの流れ」だった。

菜々子も聞いたことはあったが、歌詞までは知らなかった。

「モルダウの川の流れは、今も昔もずっと故郷を守っている…」  
「というような意味だった。明良の声はテレビで聞くより澄んでいて、何か心が落ち着くようなそんな声だった。」

「…悲しいメロディーですね。」

菜々子が言った。明良は少し涙ぐんでるように見えた。

「…歌いながら、僕を守ってくれていた、死んだ姉のことを思い出していました。」

「あ…血がつながっていないという…。お母さん代わりに明良さんを育ててくださったんですね。」

「ええ…。私がアルコールで死にかけたのをご存じだと思うんですが…」

「もちろん。とても話題になっていましたもの…。その時にお姉さ

んのお話も出て…。あの時、相澤さんのために、死のうとなさったんですってね。」

明良は恥ずかしそうにした。

「…若かったんですよ。今思えば、もっと違う方法もあっただろうに。…でも、あの時も死んで構わないと思ってた。」

「あの時も…って…」

「ああ！すいません…。死ぬ気は今はないですよ。…姉とも約束しましたしね。…夢の中で…」

「夢の中？」

「ええ…。ワインを飲んで倒れた時、姉に会う夢を見たんです。…いつの間にか、僕はどこかの川辺に座っていたんですが、姉が横に座って…。」

「！…」

（三途の川なのかしら…）と菜々子は思った。

「姉に帰るように言われました。僕はもう独りじゃないからと…。そして、人並みに恋をして、人並みに家族を持って、自分の分まで幸せにならなきゃいけない…と、そう言われたんです。」

「……」

菜々子は何も言葉が出ず、明良の言葉を待っていた。

「…川を見ていた時、その姉の言葉を考えていました。それでその歌を…。…いつになったら、そんな日が来るんだろう…と思っていたら…あなたが…」

明良は菜々子に向いた。



「…一瞬、姉が立っているかと思いました。」

菜々子とはどったように下を向いた。

「すみません…死んだ人に似ているなんて、嬉しい話じゃないですね。」

「いえ…でも…私じゃお姉さんの代わりにはなりません。」

「姉の代わりをしてもらおうだなんて思っています…。でも、本当に嬉しかった…」

明良が菜々子の手を取った。菜々子は明良に体を寄せた。明良はそのまま菜々子を抱いて唇を重ねた。

（もしかすると…私はお姉さんに呼ばれたのかな…）

菜々子は、明良の長い口づけを受けながらそう思った。それなら、あの不思議な感覚の説明がつくような気がした。

……

明良は、自分の腕の中で寝ている菜々子の顔を見つめていた。

触れ合っている素肌が気持ちいい。

結局、相澤の言うとおり、流れに任せた形でベッドインとなった。

明良は、ブランケットを菜々子の肩まで引き上げた。

そして、菜々子の体を引き寄せた。

好きでもない男性に素肌を触られるのが嫌だと涙していた。

自分で本当に良かったのだろうか…と明良は思った。

「明良さん？」

菜々子が目を覚まし明良を見上げた。

明良は微笑んだ。

「おはようございます。…といっても、まだ夜は明けていないよう  
ですが…」

「よかった…」

菜々子が明良の体に密着するように体を寄せた。

「まだ時間はあるのね。」

「ええ。」

明良はふと不安だったことを尋ねた。

「さっき、何か震えていたようにけど…大丈夫ですか？」

「え？」

菜々子は顔を上げて、少し恥ずかしそうにした。

「嬉しさで…体が勝手に…」

明良も少し照れくさくなった。

「嬉しさで？」

「ええ…本当に好きな人に抱かれたの…久しぶりだったから。」

「ねえ…菜々子さん…」

明良は、菜々子の体を上に上げるようにして、お互いの顔を近づけ

た。

「？はい？」

「…もうベッドシーンは断ってください。」

「！？…え？」

突然の言葉に、菜々子とはまどった。

「先輩があなたのことを「清纯派」だと言っていました。…そう思っている人もまだまだいると思います。あなたがそんな無理をしなくても、女優を辞めさせられることはないと思います。」

菜々子は下を向いた。

「むしろ、あなたに辞められて困るのは事務所の方でしょう。…もつと自分に自信を持って…。」

菜々子は潤んだ目で明良を見た。

「はい。これからは断ります。」

明良がほっとした表情をして、菜々子の体を再び抱きしめた。

2人は自然に唇を引き結んだ。

\*\*\*\*\*

身支度を整えた明良が、鏡の前でドライヤーで乾かしたばかりの髪を手ぐしで直していた。

菜々子がそれを見て言った。

「今度、何か整髪剤を買っておきましょうか？」

「ああ、いえ…」

明良は髪を直しながら、菜々子に振り返った。

「整髪剤だめなんですよ。無香料だとましなんですが…基本的にはつけません。」

「整髪剤で酔うの？」

「ええ…困ったことにね。」

明良が苦笑しながら言った。そして髪が整ったのを確認すると、横にいる菜々子の体をすつと抱きしめた。

「実は香水もだめなんですよ。…あなたがつけられない人でよかった。」

菜々子は明良の体の中で目を閉じた。安心感のようなものが体の中から広がっているのがわかる。

「今日、生放送で先輩と音楽番組で踊ります。」

「！」

明良の言葉に、菜々子は嬉しそうに明良を見た。しかし明良は表情を暗くした。

「最後かもしれない…。」

「そんなこと言わないで…楽しみにしています。」

「ええ…。」

明良は、菜々子の顔を引き寄せて唇を重ねた。  
長いキスの後、再び抱き合った。

「…きりがいいな…」

明良がそう言って笑った。菜々子も笑いながら、

「今夜も来てくれます？」

と言った。

「必ず」

明良はそう答えた。

（終）

## 出逢い（後書き）

お読みいただきありがとうございます（^^）

正直、元が夢想なので、なんか時間と会話がたらたら進んでいるだけで、盛り上がりにはかけるような気がします。

でも、ですね…夢想小説つてのは、このたらたら（延々と続く…）が大切なんです！（？）

たとえば、女性の方ならば、この「菜々子」を自分とするわけです。セリフが決まっているので、自分が言っていると思ってください。で、相手の「明良」は、好きなタレントさん、俳優さん、芸人さん（！）を当てはめてください。

…いいですよ…「明良」があなたのために、怒ったり、手を握ってくれたり、車に乗るために、助手席のドアを開けてくれたり、部屋まで送ってくれるんですよ！（笑）

男性の方は、もちろん「明良」になって、好きな女優さん、タレントさん、芸人さん（！）を菜々子にあてはめ、エスコートしてあげてください。いいですよ…菜々子があなたの行動に涙してくれ、帰りたくないなんて思ってくれ、ひきとめてくれるんですよ！！

ちょっとは楽しめると思うのですが、夢想慣れしていない方は頑張ってください（？）

では、また次回もよろしく願いいたします（^^）

## 迷い

「ねえ！明良さん、これ！」

ワンピースを着た菜々子が試着室からでてきた。そして椅子に足を組んで、座って待っている明良に呼びかけた。

「…よく似合ってますよ。」

「ほんと？」

明良の言葉に菜々子が嬉しそうに答えた。

付き合い始めてひと月経つ。今日は六本木のブティックに2人は来ていた。

店の前は大変なことになっていた。ギャラリーもすごいがレポートもいる。

（菜々子さん効果だな。）

明良は冷静にそう思っていた。

「買っていい？」

「ええ。」

菜々子は店員に「このワンピースいただくわ」と言って試着室に入っていた。

店員は「ありがとうございます。」と頭を下げていた。

.....

「明良さん、ありがとう！」

喜んでいる菜々子に、明良が微笑む。

ワイドショーでは、そんな2人を冷静に見ている。

明良が最近あまりテレビに出ていないため、菜々子と付き合うことは売名行為だと痛烈に批判していた。

対して菜々子は、人気が急上昇している。

それは「今後一切脱がない」と事務所に言ったことから始まった。事務所はそんな菜々子に仕事を回せないと抵抗した。だが菜々子は強気だった。じゃあ辞める…と言ったのである。

突然菜々子がそう強気になったのは、もちろん明良のためである。困ったのは事務所の方だった。

今、菜々子に辞められたら困る。でも、菜々子を脱がせることによつて、今まで思った以上に稼げていたのは確かである。

事務所は菜々子を説得した。だが菜々子は決して首を縦に振ることはなかった。元々清純派だったこともあり、そのことで逆にファンを増やした。

そのうちに事務所も何も言わなくなった。

…それでも菜々子はさほど喜んではいなかった。菜々子が忙しくなり、明良との時間が取れなくなったからである。

明良に会いたくても、会えない日が続くようになった。それでも菜々子は、その忙しさに心地よさを感じるようになった。

最初は、明良と会えない日を数えていたが、会えなくても、耐えられるようになってきていた。

そのうちに明良から連絡が来なくなった。忙しい菜々子は、そのことにもあまり気にすることがなくなっていた。



明良との絆はどんなことがあっても切れないように思っていたのである。

.....

久しぶりに休みが取れたある日：

菜々子は前の晩から、眠り続けていた。このところ、ずっと休みがなかったのだ。

目が覚めた時は、もう夕方になっていた。

「久しぶりに、よく寝たー！」

菜々子はベッドの上で、伸びをした。  
携帯のメールと電話をチェックしたが、何もなかった。

（これはこれで寂しいけど...）

と思ったが、対して気にはしていなかった。

すると、突然マネージャーから電話が入った。

「おはようございます。」

菜々子はそう言って電話に出た。

「あの...北条さんが...」

「...？明良さんがどうしたの？」

久しぶりに聞いた名前のはずなのに、その時も何も感じなかった。

「…声が…出ないそうで…」

「声が?…どういうこと?」

「…ポリープみたいなのができているそうなんです…もしかすると…悪性かもしれない…」

「!?!?…ガン…ってこと?」

「…まだ検査の結果が出ていないとかで…」

「いつ入院したの?」

「先週の金曜日だとか…」

もう5日も経っている。

「…明良さんのいる病院教えて。」

菜々子は急いでメモを取った。

………

菜々子は病院へ急いでタクシーで向かった。

看護婦から、もう面会時間がほとんどないと言われたが、少しでも明良の顔を見たいと思っていた。考えてみれば、かなり久しぶりなような気がする。

「まあ!よかったわ!」

病室へ向かう菜々子の顔を見て、通りがかった婦長がうれしそうに言った。

「?」

「北条さん危なかったんです。今日目覚めたところなんですよ。」  
「え!？」

「北条さんは特異体質なので麻酔が難しくて…。充分気をつけたんですけど3日間目覚めなくて…」

「!?!」

「お昼にやつと目覚めて、ほっとしたところだったんです。」

菜々子は婦長に頭を下げると、急ぐように病室に向かった。

……

明良がいる病室を覗いた。

ベッドに明良が寝ている。菜々子がそつと近寄ると、明良の目がすつと開いた。

「明良さん…」

菜々子がそう声をかけると、明良がにっこりと微笑んだ。

そして、自分の喉を指差して、両方の人差し指で、×のマークを現した。

菜々子はうなずいた。声を出せないというサインだとわかった。

明良は、枕元にあったメモ帳とペンを取った。

筆談するのだと菜々子は理解した。

『テレビで見てた。…元気そうで何より。』

メモ帳に、明良がそう書いた。菜々子は「元気よ」と言った。

意識不明だったことは知られたくないのだろう…と思い、菜々子は何も言わなかった。

明良が微笑んで、ペンを動かした。

『これからがんばって』

と書いた。菜々子は「ええ。ありがとう。」と明良に微笑んだ。

『…もうここに来ちゃいけないよ。』

新しい紙に明良がそう書いたのを見て、菜々子は驚いて明良の顔を見た。

その菜々子の表情を見て、明良はただ首を振っている。

「どうして？どうして来ちゃいけないの？」

菜々子は明良に尋ねた。明良は微笑んで、またメモ帳にペンを走らせた。

『とにかく来ちゃいけない。何も聞かないで。』

「…どういうこと？」

菜々子がそう震える声で言うと、明良はあわててまたメモにペンを走らせた。

『ガンじゃないのは検査で結果が出たから、大丈夫。』

菜々子がそれを見て、ほっとした顔をした。

『でも、もう来ちゃいけない。』

「明良さん？」

『…今までありがとう。』

明良はそうメモに書いた。

「…どういうこと？別れるということ？」

そう菜々子が言うと、明良が目を伏せた。

「明良さん…？」

その時、看護婦が病室に入ってきた。

「…すいません。…面会の時間がもう…」

「あ、はい！ごめんなさい。」

菜々子は、ふと明良の顔を見た。明良が微笑んでうなずいた。

菜々子は明良に手を振った。明良も手を振っている。

菜々子は病室を出た。

・・・

数日後、明良の退院を告げるニュースを見た。

「よかった…。」

菜々子は心からほっとした。

しかしその日はドラマの撮影があり、明良に連絡を取る時間がどうしても取れなかった。

.....

夜中…疲れ切っていた菜々子の耳に、携帯の着信音が響いた。

「なあにー？こんな夜遅くに。」

菜々子はそう呟いて、携帯を見た。画面には「相澤さん」と出ていた。

「！…」

菜々子は電話を取った。

「もしもし？」

「菜々子ちゃん？」

「はい。」

「ごめんね。こんな夜中に。今、いいかな…。お昼は仕事がいっぱいだったって聞いたから、なかなか連絡を取れなくて…」

「いえ…私の方こそごめんなさい。」

「あのさ…明良から連絡ない？」

「…ないです。退院前に病院に行っただけですけど…。もう来ないでいい…って…」

「そうか…」

相澤がその言葉の後、沈黙した。

「相澤さん？」

「明良なんだけど…」

「はい？」

「実は…退院してから、あいつ声が出なくて…」

「！？…え！？」

菜々子は、初めて体が震えるのを感じた。

「…菜々子ちゃん…明良のところへ顔を出してやってもらえないかな…」

「…仕事が…」

「そうだよね…。実は明良にも口止めされてたんだ。」

「！？」

「ただ…明良のこと…忘れないでほしいんだ。」

「…相澤さん…」

「…ごめん。それだけ言いたかった。」

「……」

「じゃ、ごめんね。」

相澤の電話が切れた。

……

明良の声がでない…。菜々子はぼんやりと、撮影の休憩中にそのことを考えていた。

そして、明良の「モルダウの流れ」を歌う声を思い出した。

その時の明良の声は澄んでいた。何か子守唄を聞くような、優しい声だったことを思い出した。

（明良さんの歌…聞きたいな…）

ふと菜々子は思った。

……

翌日、菜々子は撮影の休憩中に明良にメールをした。

『退院、おめでとう。』

すると、明良からすぐに返事が返ってきた。

『ありがとう。』

菜々子はほっとして、またメールをした。

『まだ声が出ないって聞いたけど…』

『うん。よくわからないんだけど…テレビで見る。頑張ってるね。』

『明良さんも、早く声が出せるようにがんばってね。またモルダウ聞かせてね。』

『菜々子さんとは、もう会わない。』

菜々子は明良のその言葉に驚いた。『どうして?』とすぐに返信した。

『たぶんこれからずっと、僕はあなたに何もしてあげられないと思う。それなら僕があなたの傍にいない必要はない。』

「!」

菜々子は返信するのを忘れ、携帯電話を持ったままその文章をぼんやり見ていた。



『声が出るようになって、たぶん前のように歌えないと思う。僕はもう引退を考えていたし、いい潮時だと思ってる。でも仕事ができない僕が、このまま菜々子さんの傍にいと迷惑をかけてしまうような気がする。』

それを見た菜々子の目に涙があふれた。  
続けてまたメールが入った。

『だから…もう会わない。でも僕は、あなたのファンでずっといるから。』

「嫌…」

菜々子はそう呟いたが、もちろん明良には届かない。

『ずっと応援してるから。』

「嫌…！」

その後、メールは入ってこなかった。

……

その後の撮影は散々なものになった。

菜々子の目はずっと腫れたままで、それをメイクでごまかせても、菜々子自身がセリフを言えなくなった。

結局、翌日撮り直しとなったのである。

帰りの車の中で、菜々子は何度も明良に電話をした。だが電源が切られているようなメッセージしか帰ってこなかった。

「北条さん…つながりませんか？」

マネージャーが運転しながら言った。

「ええ…」

「心配ですねえ…」

その時、橋にさしかかった。

「！…」

菜々子はあわてて辺りを見渡した。そしてはっとした顔を見ると、

「止めて！」

と言った。

マネージャーが驚いて、ブレーキを踏んだ。

「先に帰ってて！」

菜々子は車を飛び出した。

……

明良が橋から川を眺めていた。

初めて出会った時と、全く同じだった。

菜々子はゆっくりと、明良に近づいた。

明良が菜々子に向いて、目を見開いた。

「…独りで勝手に決めないで。」

菜々子がそういうと、明良は視線を反らした。

「…明良さんのせいで、あのメールの後の撮影は散々だったのよ！  
…皆に迷惑かけたんだから！」

菜々子がそう言うと、明良は申し訳なさそうに下を向いた。そして、菜々子に体を向けると小さく頭を下げ、背中を向けて歩き出した。

「明良さん！」

菜々子が追いかけた。

「…どうして怒らないの！？」

明良が立ち止った。

「声が出なくても…怒ってよ！…どうしていつも…自分ですべて背負っ  
っちゃうの？」

菜々子はそう言って明良の前に回った。

「手術のことだってそう…目が覚めなかったことだって…どうして  
言ってくれなかったの！？」

明良は目を合わさないようにして、菜々子を避けて再び歩き出す。

「行かないで！」

菜々子が再び明良の前に回り、明良の体を抱きしめた。が、明良は抱き返さない。

そつと菜々子の両腕を取った。そして菜々子の体をゆっくり離れた。菜々子が驚いて明良を見上げた。明良は無表情のまま、また菜々子を避けて歩き出した。

（本当にもう…駄目なのね…）

菜々子の目に涙が溢れた。

「間に合った！」

その声に驚いて、菜々子は振り返った。

相澤が車から降りて、明良に向かって走り寄ってきていた。

明良も驚いて立ち止まっている。

「ここにいたとはな。」

相澤はそう言いながら明良に駆け寄り、そのまま両肩を掴むと明良の体を菜々子に向けさせた。そして、明良の肩を背中から抑えたまま言った。

「いいか。逃げるな！…今、堪えないと、お前と菜々子ちゃんは一  
生苦しむことになる。」

明良の目が見開いた。

「お前が独りで苦しむだけなら俺だって気にしない。お前は慣れるからな。…でも、罪のない菜々子ちゃんまで苦しめることは俺が許さない。」

明良が目を伏せた。菜々子は手を口に当てて、涙を必死に堪えている。

「行け！」

相澤が明良の背中を押した。明良は動かない。

「ほら早く！声が出ないんだから、自分の気持ちを正直に体で表せ！」

だが、先に動いたのは菜々子の方だった。菜々子そのまま明良に駆け寄り、明良の体を抱きしめた。

「私にチャンスをちょうだい…」

菜々子のその言葉に、明良の目が再び見開かれた。菜々子は、体を離して明良の顔を見た。

「あなたの心を取り戻す、チャンスをちょうだい。」

明良の目に動揺が浮かんだ。

「あなたの歌が聴きたいの。…あなたの傍で…」

明良はふと顔を背けて、涙を堪えるような表情をした。

「お願い…！」

菜々子はそう言って、明良の体をもう1度抱きしめた。明良の体が小刻みに震えているのを感じる。

明良はやっと、菜々子の頭を抱くようにして、菜々子を抱きしめた。

「…明良さん…ごめんね…」

抱き合う2人の後ろで、相澤がほーっと大きく息をついた。

そして、反対車線にいる車に親指を立てて見せた。

それは、菜々子のマネージャーの車だった。

……

1ヶ月後 -

明良は自分の手を枕に、ソファーに寝転んで歌っていた。

スメタナの「モルダウの流れ」である。明良の澄んだ声が部屋に静かに広がっている。

歌い終わると、ふと自分の胸元を見た。

菜々子が明良の胸の上に頭を乗せて、じっと明良の歌を聴いていたのだ。

「菜々子さん、終わりましたよ。」

「も1回」

「えっ！？もう1回？」

明良が聞き返した。

「もう1回」

菜々子が言った。

「菜々子さん、これでもう3回目じゃないですか。」

「だって、ずっと聞いていたんだもん……。」

「僕はレコードじゃないんですよー。」

「でももう1回。」

明良ははあっとため息をついた。そして、菜々子の顔を見て微笑んでから、歌いだした。

……明良が菜々子にプロポーズしたのは、それから半月後のことだった。

（終）

## 迷い（後書き）

最後までお読みいただきありがとうございます（^^）

この夢に出てくるのが、合唱曲「モルダウの流れ」です。

皆さん、中学校の時、合唱で歌いませんでしたか？娘は知らないって言うんですよ。

今は歌わないのかな？

旋律はとても悲しいんですが、歌詞はどちらかというと、モルダウを讃える歌なんです。

平井多美子さんという方が作詞をされているんですが、いい歌ですよねえ。

歌詞をそのまま書くと著作権的にだめかなあと思って、書きませんでした。

現在でも、斎藤和義さんがそのまま歌ってらっしゃったり、交響曲「モルダウ」を元に、藤澤ノリマサさんや、平原綾香さんも詞をつけておられます。メロディーがとても神秘的な感じでいいですよ。よかったら、聞いてみてください。

ここで、明良はポリープの手術をするんですが、調べてみてびっくりしました。

今、ポリープの手術って全身麻酔だそうですね！

で、まず手術後1週間は、しゃべるのも駄目。その後1カ月は、普通の会話しか駄目。

それ以降で歌ってもよし…という段階があるそうです。

では、次回もよろしくお願い致します（^^）



## 新婚

玄関のチャームがなった。

ダイニングにいた北条明良きたじょうめいりやうは、エプロンはずしながら、インターホンを取った。

誰かはわかつている。

「玄関開いてます！」

と明良はいうと、すぐにインターホンを置いて、あわてて玄関へ走った。

玄関が開き、パーティードレスを着た妻の菜々子の肩をかつぐようにして、菜々子の女性マネージャーが入ってきた。

「あー…すみません。今日も飲み過ぎましたか。」

明良があわてて菜々子の体を抱きとめた。

「…ほら、菜々子さん靴脱いで…」

明良がそう言うと、菜々子は靴を蹴飛ばすようにして脱いだ。

「私も止めたんですけど…」

小柄なマネージャーは笑いながら、菜々子が飛ばした靴を拾って揃えながら言った。

「どんどん飲んじゃうんですよ…すみません。」

「いえ、こちらこそすいません。今日はお疲れ様でした。」

「はい！明日またお昼にお迎えに上がります。」

「わかりました。」

明良は、泥酔している菜々子の体を横抱きにして寝室に向かった。

「菜々子さん、今日は控えめにするって約束したじゃないですか。」

明良がそう言うと、菜々子は明良の首に両腕を回して「んふふ」と笑った。

「ワインがおいしかったんだもん」

「僕にはその感覚がわかりませんけどね。」

体質的にアルコールが飲めない明良は、苦笑しながら言った。寝室のドアをひじだけで開け、明良は菜々子をそとベッドに寝かせた。

「明良ー…」

菜々子が明良の首に腕を巻きつけたまま、離さない。

菜々子はいつもは明良を「さん」づけで呼ぶのだが、酔い方で呼び方が変わる。

ほろ酔いの時は「明良さん」、ちよつと深酔いの時は「明良ちゃん」、泥酔で、呼び捨てだ。つまり今はかなり酔っていることになる。また甘えん坊になっている。

「なんですか？…もう、菜々子さんの酒臭さで、僕まで酔いそう…」

「いいじゃない！酔っちゃえー！」

「もうー菜々子さんっ！…うわ…」

明良は、菜々子に無理やりひっぱられて、菜々子の体に覆いかぶさるような形になった。

「お歸りのキスは？」

「はいはい。」

明良は菜々子の唇に、チュッとキスをした。

「そんなのダメー…」

「これ以上は今駄目です！僕まで酔っちゃったら、あと誰が…！あーっ！！」

明良は菜々子を振り払い、慌てて部屋を飛び出して行った。

残された菜々子は、明良の名前を何度も呼んでいる。

やがて、明良がタンブラーに水を入れて、寝室へ戻ってきた。

「危ない、危ない…鍋かけたままだったんですよ。明日起きたら、シチュー作ってますから、温めて飲んでくださいよ。」

「えー…明日は明良いないのー？」

「事務所が開設して落ち着くまで、朝ゆっくりするのは、しばらく無理そうです。」

「ん…つまんない。」

「そのかわり、こっやって早めに帰ってきているじゃないですか。」

「それでもつまんない。」

「菜々子さん！怒りますよ！」

「明良、怒っても怖くないもん。」

明良は、思わず苦笑した。

「はい。水飲んで。」

「うーん、飲ませて…」  
「はいはい」

明良はタンブラーの水を、菜々子に口移しで飲ませた。

「んふ。おいしい。」

「それは良かった。」

「ねえ…明良：本当に経営者になっちゃうの？」  
「…またその話ですか。」

タンブラーをテーブルに置き、寝ころんでいる妻の傍に座りなおして、明良が言った。

「タレント事務所を経営するのは、相澤先輩です。僕は補佐。」

「副社長でしょう？一緒じゃない。」

「嫌なんですか？」

「だってえー！！」

菜々子はいきなり起き上がって、再び明良の首に両腕を巻きつけ、明良の体を道連れにベッドへ倒れた。

「菜々子さんっ！だから僕まで酔っちゃうって…」

「だって…明良の歌も踊りも…もう見られなくなるなんて…嫌だもん…」

菜々子は今度は泣き出した。

「あー…また始まっちゃった…」

明良は仰向けに寝て、菜々子の頭を自分の胸に乗せるように抱きし

めた。

「だから前々から言ってたじゃないですか。30になったら、足を折るって。」

もちろん本当に折るわけではない。踊ることをやめる…つまり現役を引退するという意味だ。それは29歳を過ぎてから、相澤と一緒に考えていたことだった。

同じ年で、女優の菜々子と結婚したのは先月だが、婚約時にちゃんと説明して納得してくれたはずなのに、いざ引退するとなると毎日のように菜々子がぐずるようになった。

「菜々子も辞める。」

「えっ！？どうして！」

「菜々子も足折る。」

「菜々子さんは女優さんでしょ？足折らなくていいです。」

「明良の踊り見たいのー！」

菜々子はまた泣き出した。明良は困って菜々子の頭を抱いた。そして突然優しい声で歌いだした。バラードだった。

菜々子は泣くのをやめて、しばらく明良の胸の中で黙って、明良の歌を聞いていた。

…明良の歌は終わった。

「踊りは見せられませんが、こうやって時々歌は聞かせてあげます。…これで我慢して。」

「……」

「…菜々子さんは女優を辞めたらだめですよ。」

「どうして？」

「事務所が失敗したら、食べさせてもらわなきゃ。」

「!」

菜々子が「何それ!」と笑った。明良は菜々子の頭を抱いて笑った。

「さ、シャワーは…あ…浴びない方がいいですね。明日酔いがさめてから浴びてください。とにかく着替えましょう。」

「うーん…着替えさせて。」

「はいはい。」

明良は菜々子から離れて、クローゼットから菜々子のワードローブを取りだした。

「えーと?この服どうなってんの?はい、うつぶせになって。」

「ん…」

菜々子は言われるとおりにした。もう眠りそうだ。

「あ、こんなところにファスナーがあるのか…。」

明良は菜々子のドレスのファスナーを下ろした。

(終)

## 引退

相澤と明良の引退番組が始まった。  
番組からの希望で、生で歌わなければならない。ただダンス曲は1曲だけにもらった。

「あー…胃が痛い。」

相澤が言った。明良は苦笑したが、気持ちはわかる。

「飲みすぎですか？」

そうわざと明良が言っていると、相澤は「ばか」と言って、笑った。

「…お前と一緒に歌うのも最後だな…。寂しいよ。」  
「……」

明良は涙が出そうになって、ふと横を向いた。

「まだ泣くなよ。」

「…わかってますよ。」

明良の声はもう涙声になっていた。

……

「うわー…若…」

生放送収録中、相澤と明良は自分達が、明良の復活番組で踊っているのを録画で見っていた。もちろん、これはそのまま放送されている。相澤は腕を組んで笑みを浮かべながら見ているが、明良は真剣な表情をしていた。

(…この頃が一番つまかった…)

そう思っていたのだ。今はとてもじゃないが、こんなにキレのある踊りはできないと思った。百合さんが褒めてくれていた「迫力」もわかるような気がした。

「この復活番組の後に…」

司会の女性アナウンサーが言った。

「解散の危機があって、サプライズをされましたよね。」

「!？」

2人は何も言えなかった。あれは他局の番組だったからだ。

「こちらサプライズです。ビデオお借りできました。」

相澤と明良は固まって動かない。

「サプライズのビデオ、どうぞ!」

女子アナウンサーがキューを出した。

すると、相澤がその他局の音楽番組の司会者と話しているところがながれた。



「うわー…」

相澤が思わず声を出している。

明良も真剣な顔で画面を見つめていた。

この時は、もう世間では、明良と相澤がユニットを解散したものだと思われていた。だが、2人は秘密裏にこっそり連絡を取り合い、このサプライズの準備をしていたのだ。

曲が始まった。イントロはほとんど相澤のアップだったが、相澤が歌う寸前、カメラが引いて、全体を捉えた。そして明良が何かを投げたのが映った。

「ここじゃ、まだテレビを見てる人はわかってないな。」

相澤の言葉に、明良がうなづく。

しかしすぐにカメラが珍しくぶれて、慌てて明良の顔を映した。

「うわ…」

明良は恥ずかしさに、思わず両手で顔を伏せた。

かなり緊張した顔で踊っている。

カメラは、動揺する歌手たちや客席も映していた。

「かなり驚かれていますよね。」

司会者が言った。

間奏で、上下で2人が振りを合わせて踊っているところは、正直自

分達でも思わず拍手するくらいぴったりあっていた。

「この頃が…一番良かったなあ…。」

相澤が呟いた。明良はふと下を向いた。もう涙がこぼれそうになっている。

最後に2人が抱き合っているシーンには、さすがの相澤も両手で顔を覆った。

「恥ずかしー！めっちゃ、青春してるこいつら。」

照れ隠しにそう言っている。明良も笑ったが、この時に相澤との友情が更に深まったような気がしていた。

.....

実は、今日1曲だけ踊るのは、このサプライズの時の曲だった。

「えー？これ見た後に踊るのー？」

相澤が言った。明良も手で片目を覆って、とまどった表情をしている。

「大丈夫です！大人の踊りを見せて下さい！」

司会者の言葉に、2人は思わず笑った。

「そう来たか。うん。そういうことにしようか。」

と相澤が言い、明良がはーっと息をついた。

「スタンバイ、お願いします！」

司会者にそう言われ、何か2人とも、とぼとぼと歩きだした。スタッフが笑っている。

2人はスタンバイしながらも、お互い「どうする？大丈夫か？」というような会話を交わした。

サプライズと同じように、相澤が段上、段下に明良がスタンバイし、明良の両隣りには、若いダンサー達が2人ずつスタンバイした。明良は両方のダンサー達に会釈した。ダンサー達も返してくれた。

「明良…いいか？」

相澤がマイクをはずして言った。

「…待つて…」

明良が答えた。…緊張で体が震えてしまっていた。

「泣きながらでもいいから、最後まで踊ろう。」

相澤のその言葉に、明良はうなずいた。そして、背中に手をまわしてOKの合図を出した。

相澤がゆっくり2回指を鳴らした。

同時に歌いだす。見事なハーモニーに、思わずスタッフから拍手が起こっていた。

イントロが流れ、2人とダンサーたちが動きだす。

後は、ただ2人とも夢中だった。

若い頃の記憶が何度もフラッシュバックする。

間奏のところは、明良が段上に上がり、2人で並んで踊った。お互いの振りがぴったり合っているのがわかる。

そして、曲も終り、最後のポーズを取った。

明良が上げていた手を、ゆっくりと下ろして目を閉じたとき、相澤が背中から明良を抱きしめてきた。

明良も振り返って、相澤を抱いた。

「俺たち、まだ青春してるよー」

その相澤の泣き声に、明良は泣きながら笑った。

・・・

生放送なので、ゆっくり余韻に浸る暇もなく、次の曲となった。

「お2人とも大丈夫ですか？」

司会者の女性がそう声をかけてくれた。

「体が痛いですが、大丈夫です。」

相澤がそう言うと、スタッフが笑った。

この後は1曲ずつ、1人で歌う。

相澤は自分の曲で一番気に入っているのを選んでいた。  
しかし明良は…。

相澤の曲が終わり、明良の番となった。

「明良さんの曲は、私もびっくりしたんですが…合唱曲ですよ。」

明良が少し照れくさそうに笑った。

「今、スタジオにも合唱団の方にスタンバイしていただいています  
が、この曲はどうして？」

「妻と出会った時に、□ずさんでいたんです。死んだ姉のことを思  
い出しながら…」

「わー…ロマンチックですねえ！」

「曲の内容とは違いますけど…」

明良がそう言って、頭を掻いた。

「ずっと好きだったんですか？」

「そうですね…。いつからか覚えていないんですが、辛い時とかに  
□ずさんでいました。でも歌いこなすことがどうしてもできなくて  
…今日はうまく歌えるか心配です。」

「この曲はいろんな歌手の方が歌詞をつけておられますが、合唱曲  
の平井多美子さんのを使われるんですね。」

「そうです。姉に守られていたことを思い出せるので、この歌詞が

いいですね。」

スタンバイOKのサインが出た。

「では、明良さん、スタンバイお願いします。」

司会者に言われ、明良は合唱団の前に立った。そして合唱団に振り返って、深く頭を下げた。

合唱団と指揮者、オーケストラの団員達がびっくりしたように、明良に頭を下げ返している。

明良は微笑んで「よろしくお願いします。」と言い、カメラに向いた。

「スタンバイできたようです。では、北条明良さんで「モルダウの流れ」です。」

オーケストラがイントロを流した。

最初の1番は明良が独りで歌った。オペラ歌手のように声を張るのではなく、語りかけるような歌い方で歌うので、一瞬、スタッフや相澤達が息をのんだのがわかった。

2番から合唱団が入った。明良の声が負けるかもしれないように思えたが、明良の歌声は合唱団とは全く違うトーンなので、それが逆に想像以上の効果があった。

最後は本当は、かなりの盛り上がりを見せて終わる曲だが、一番最後のフレーズは合唱団の方にもお願いして、静かに歌ってもらった。

必死に涙を堪える明良の顔がアップになった。それがわかったのか、明良は照れくさそうに横を向いた。

そして合唱団とオーケストラに振り返り拍手をした後、頭を下げた。拍手がなかなか止まらなかった。

「さて、これが本当に最後の曲になるわけですが…お2人のユニットのデビュー曲ですよね。」

司会者と相澤達は並んで立っている。

「そうです。」

相澤が答えた。

「びっくりしたんですけど、デビュー曲はバラードだったんですね。」

「そうそう。明良が首を痛めてた時なので、バラードになったんです。」

「ちよつとその時のビデオを見てみましょうか。」

「えー？また比べるのー？」

その相澤の言葉に重なって、スタッフの笑い声中、ビデオが回った。

2人は最初、離れて歌っているが、途中からお互い向き合い、近づきながら歌った。

「…これ、姉貴の趣味なんだよな。」

相澤が呟いた。明良は苦笑した。

2人は見つめあって歌っていたが、曲が終わった途端、照れくさそうにさっと顔を背けていた。

2人は思わず笑った。ビデオの中でもスタッフの笑い声が入っている。

「…今日はどうなるんですか？見つめあいます？」

「最後に見つめあっとくか。」

相澤がそう明良に言った。明良は笑ってうなずいた。

曲のイントロが流れた。

ビデオの時と全く同じようにして2人は歌った。

見つめあって歌うところは、もはや2人は照れくさそうな笑顔を見せている。

しかし、途中で明良がマイクを下ろした。そしてそのマイクを持った手を額に乗せて泣き出した。

相澤は独りで歌いながら、明良に駆け寄るようにして明良の頭を抱いた。そして歌いながら「ちゃんと歌え」というように、明良の背を叩いている。

明良がやっとマイクを持ち直した。最後まで歌いきると、やっぱり2人は抱き合っていた。

司会者がもらい泣きをしている姿が映った。スタッフが拍手をしている姿も映っている。

すべてが終わった。



スポンサーの紹介のところになった時、スタッフが明良に何かのサインをした。相澤が先に気づいてそちらを見ると、慌てて明良の肩を叩き、カメラの後ろを指差した。

妻の菜々子が花束を持って立っていた。

明良は思わず妻に駆け寄っていた。そして抱きしめた。

「明良さん、とっても素敵だったわ。」

明良に抱きしめられたまま、涙声で菜々子が言った。

「ありがとう。」

そう言っ、体を離すと、菜々子は持っていた花束を明良に渡した。受け取った時、菜々子が明良の涙をハンカチで拭いてくれた。

…明良は気付かなかったが、その様子もずっと放映されていたのだった。

・・・

「お前のあの時のモルダウがさ…えらい反響あったんだって。」

まだ準備中の事務所の社長室で、相澤が言った。事務所は開設していないが、営業だけは始めていた。

「え？そんなんですか？」

明良は相澤が入れてくれたコーヒを飲みながら言った。

「でさ…おまえ「モルダウ」レコーディングしない？」

「えっ！？…だってもう歌わないって。」

「レコーディングだけだよ。お前の最後の曲で、うちの事務所のデビューシングルってわけだ。」

「！…」

「頼むよ。合唱団は無理だけどさ、小さなオーケストラは用意できるから。」

「わかりました。…社長がそうおっしゃるなら…」

「よっしゃ！決まり！」

相澤がガッツポーズをしている。早速、簡易机に座り、電話をかけた。

「でもなあ…」

その明良の呟きに、相澤があわててかけかけた電話を切って「どうした？」と言った。

「あ、いえ！なんでもないです！」

明良がそう言いながら、あわててコーヒを飲む。相澤は不思議そうな表情をしたが、再びプッシュホンを押した。

（本当はそつとときたかったんだけどな…）

明良は菜々子と出会った瞬間を思い出していた。

・・・

明良は、モルダウを口ずさみながら、川を見ていた。  
すると、突然「明良さん！」という優しい声が聞こえる。  
その声に振り向くと姉の姿が見えた。しかしその姿が一瞬にして消え、菜々子がいた。

…その菜々子の姿はまるで、天使のように輝いて見えた。

（終）

## 幸せの基準

朝 -

携帯電話がなった。

ベッドの中で、素肌で抱き合って眠っていた明良と菜々子が同時に「うーん、どっち？」と言った。

「あー…僕のベルです。」

明良がそう言い、枕元にある携帯を手で探った。そして携帯を見つけて取り上げると、開いて電話の相手を見、電話を取った。

「おはようございます。」

明良がそう言うと「まだ寝てたのか。」という相澤の声がした。

「すみません。」

「いや、今日はお前休みにしていたからいいけど…。あ、そうか。お前休みだったわ。」

明良は目を閉じたまま、くすくすと笑った。まだ頭が起きていないが、何か相澤の言っていることがおかしかった。

「いいですよ。どうしました？先輩。」

「今日お昼に俺の部屋に寄ってもらおうと思ってたんだけど…。いや…俳優部門を作ろうと思ってるんだけど、どうかなって。」

「うちにですか？」

「うん。歌手専門のつもりだったけど、俳優や女優も育てたいな…  
って、昨夜ふと思いついてさ。」

「…確かに、今のところ事務所は順調ですけど…俳優さんは、同じ  
業界でも全く畑が違いますから、未知の部分が多いように思うんで  
すが…。」

「なるほどね。…また明日、俺ん所来てよ。明日話そう。」

「わかりました。」

「ラブラブのところ、悪かったね。」

「!..!」

明良は、驚いて辺りを見渡した。傍には菜々子が自分の胸にしがみ  
つくようにして寝ている。

「…隠しカメラ?..」

思わず明良は呟いた。

..

「俳優部門ねえ」

菜々子がハムエッグを作りながら、カウンターの前で、新聞を読み  
ながらコーヒーを飲んでいる明良に言った。

「ええ。急に思いついたそうですよ。」

「何かあったのかしら?」

「さあ…」

菜々子は、明良の前に「はい」と言って、出来たてのハムエッグが

乗ったお皿を置いた。

「ありがとう。」

明良は先に焼いていたトーストをかじった。

「女優の菜々子さんとしては、どう思います？」

「うーん…」

菜々子は、自分の分の卵を焼きながら言った。

「明良さんがさっき言ってたみたいに、畑が違うといえば違うから、最初は大変じゃないかなあ…。でも、将来的には考えてもいいんじゃない？1つの考えに凝り固まらないで。」

「なるほど…。」

明良は新聞を畳み、ハムエッグにとりかかった。

「でも、俳優さんの育て方から勉強しなきゃなりませんね。…営業の仕方だって違うだろうし…。」

「明良さんのところに俳優部門が出来たら、私移籍しちゃおうかなあ…」

「えっ！？本当ですか!？」

「だって…そうだったら、わざわざ違う事務所にいる必要ないじゃない？」

明良は子どもが喜ぶような顔をした。…が、すぐに頭を抱えた。

「…でも、菜々子さんの事務所が離れますかね…」

「そこなのよね…。私も育ててもらってるから、むげにはできない

んだけど…。」

「でも、前向きに考えておきますよ。」

「もう明良さんって、最初は渋ってたくせに、げんきな人ね。」

菜々子のその言葉に、明良が照れくさそうに笑った。

・・・

菜々子は昼から、前のドラマで一緒だった女優同士でランチを食べる約束をしていた。

「ごめんね…前々から約束してた日だったから。」

運転している明良に、菜々子が謝った。

「いいですよ。人づきあいもお仕事のうちです。そのかわり、夜、ご飯一緒に食べに行きましょう。」

「外は嫌…家で食べたいわ…」

明良は笑った。

「そうですか。」

「明良さんが作るビーフシチューが食べたいんだけど…」

「わかりましたよ。作っておきます。」

「ありがとうございます！」

菜々子はそう言って、明良の頬にチュッとキスをした。

レストランから少し手前に、明良は車を止めた。

「1時間程してから、また来てみます。」

「ええ、ありがとう。」

「行つてらっしゃい。」

「行つてきます。」

菜々子は車から降りた。

.....

フレンチレストランの個室で、菜々子を入れて4人の女優が集まっていた。

ほぼ同じような年代だが、その中で結婚しているのは菜々子だけだ。バツイチの女優も1人いるが。

菜々子は少々気まずいような気もしたが、断つたらよけい気まずくなるので、今日のランチに参加した。

「うらやましいわねえ……」

早速、独身の女優が切りだした。菜々子は肩をすぼめた。

「どうやって知りあうの？あんな素敵な人。」

「……私の場合は、たまたま……。それに私から声をかけましたから。」

「あー……そうだったわね。……やっぱり女から積極的に行った方がいいのかしら。」

菜々子は（うわー……針のむしろー）と思いながら、スープを飲んだ。

「よく雑誌にあるけど……本当にずっとラブラブなの？」



「いえ…その…」

その時、じつと黙っていたバツイチの女優が急に口を開いた。

「でも、ご主人って、ずっと菜々子さんに敬語よね。名前もさんづけで呼んでるし。」

ちよつととげがあるように思ったが、菜々子は急に恥ずかしそうに顔を赤らめた。

「？」

女優達は、どうしてここで顔が赤くなるのかわからない。

「どうしたの菜々子さん。」

「い、いえ。何でもないの。」

まさか口に出して言うわけにはいかない。

実は、明良はベッドの中だけ菜々子と呼ばひ捨てにする。それは、結婚前からの明良の癖というか、ルールというか…。

「何か気になるわ。」

「気になるわね。」

独身の女優が口々にそう言い、菜々子を見た。

（絶対に言えない！！）

菜々子はごまかすことにした。

「敬語はやめてって最初は言ってたんですけど…どうしても治らないから、もうそのままで…」

「他人行儀じゃない？もつと菜々子さんから言ったら？」

そのとげのある言葉に、独身女優達が少し気を遣う様子を見せた。

「でも、誠実そうじゃない。そういうところが…」

「それも、プロダクションの副社長さんですものね。」

菜々子は話題が変わって、ほっとした。

「でもいつどうなるかわかりませんし…気を抜けないわ。」

「そうよね…」

菜々子の言葉に、独身女優達がうなずいている。

バツイチの女優は相変わらず、機嫌が悪いようだ。

結局、大した話題もなく、女優達は解散することになった。  
レストランを出たところで手を振りあって別れた。  
その時、反対側の車線に夫の車が止まるのが見えた。

菜々子は道路を渡って車に駆け寄った。明良は助手席のドアをあけて待っている。

「ありがとう。明良さん。」

「楽しかったですか？」

「え、ええ…」

明良はドアを閉め、運転席に回った。

菜々子はバツイチの女優がじっとこちらを見ているのに気付いた。

(！)

明良は気付いていないようだが、ずっと車を発進させた。  
菜々子はほっと息をついた。

明良は運転しながら尋ねた。

「女優さん達ってどんな話をするんですか？」

「……」

「？…菜々子さん？」

明良は菜々子の元気がないことに気付いた。

「どうしたんです？何かあったんですか？」

菜々子は、はっとしたように明良を見た。

「別に…何でもないの…。…その…明良さんが私に敬語だから、他  
人行儀だっって言われて…。」

明良が笑った。

「そうですか。そう言われてもね…。僕の癖ですから。」

「いいの。…そうじゃない時もあるから…。」

菜々子がそう言って、下を向いた。明良も顔が赤くなっている。

・・・

家に着くと、ビーフシチューのいい香りがした。

明良はキッチンに入って、止めていたシチューの火をつけた。

「あと2時間は煮込まないとな…。菜々子さん、コーヒー淹れましようか？」

「お願い…」

と菜々子は言うてから、慌てて言い直した。

「…いいわ。自分で淹れるから。」

「?…」

(何か様子がおかしいな…)と明良は思った。

菜々子は明良が自分を見ていることに気付いて、ごまかすように言った。

「ちょっと…着替えてくる。」

「ええ。」

菜々子は、リビングを出て行った。

・・・

明良は時々シチューの具合を見ながら、菜々子が戻ってくるのを待っていた。

しかし、30分も経つのに菜々子がリビングへ戻ってこない。

明良は不安になって、シチューの火を止め、クローゼット部屋に向かった。

そしてクローゼット部屋のドアをノックした。

「菜々子さん？…どうしたんですか？」

返事がない。

「開けますよ。」

そう言って、そっと開けてみたが、菜々子はいなかった。

「！？」

明良は寝室へ行ってみた。そして寝室のドアを開けた。

「！…菜々子さん…もう…びっくりさせないで下さい。」

「……」

菜々子は着替えもせず、ベッドにうつ伏せになって寝ていた。

寝ているといっても、寝ころんでいるだけだが…。

明良が、そつと隣に座ると、菜々子は明良とは逆の方に顔を向けた。

「菜々子さん？…何を怒っているんです？」

「怒ってなんかない！」

「怒ってるじゃないですか…」

「…ちよつと考え事してるから、出て行って！」

「…わかりました。」

明良は菜々子が心配だったが、ベッドから立ち上がりドアのノブに手をかけた。

「…待つて…」

「？」

菜々子のその涙声に、明良は思わず振り返った。すると、いつの間にか起きていた菜々子が明良の体にしがみついてきた。

「！……菜々子さん……？」

菜々子は泣いていた。

明良は訳がわからないが、とりあえず菜々子を横抱きにして、もう1度ベッドにそつと寝かせた。

そして菜々子に寄り添うようにして、体を横にした。

「……何かあったんですか？」

菜々子はまた明良の体にしがみついてきた。明良はそのまま菜々子の体を抱きしめた。

「ちゃんと説明してくれなきゃ、わからないじゃないですか。」

「……明良さん……私……明良さんにとって……必要なのかしら……」

「！？……どうしてそんなこと……必要に決まっているじゃないですか……」

思わぬ菜々子の言葉に、明良は動揺した。女優達に何か言われたのだろうか……と思った。

「何か言われたんですか？」

そう菜々子を抱いたまま尋ねると、菜々子がやっと話し出した。

菜々子はバツイチの女優に「できるだけ早く女優を辞めなさい」と言われたのだった。

その女優は、自分が女優を続けているために、離婚したのだという。家の用事もする時間がなく、主人とゆっくり時間を過ごすこともできず、とうとう主人の方が我慢できなくなって、離婚させられたらしい。

「私も彼女みたいに、明良さんに何もしてないって…思ったの…。」

「！？菜々子さん…。」

「今日だって…当たり前みたいに車で送ってもらって、晩御飯まで作らせて…迎えに来させて…私もしかすると…愛想尽かされるんじゃないかって。」

明良は泣きながら言う菜々子に、首を振った。

「車で送り迎えするのは僕が勝手にやっているだけだし、晩御飯だって僕の作る料理が食べたいって言われたらうれしいから、喜んで作ります。そんなことで愛想なんか尽かしませんよ。」

明良は菜々子の体をそつと離して上を向かせると、菜々子の涙を指でぬぐった。

「それに、幸せの基準は人それぞれだと僕は思っています。その御主人はきつと奥さんに尽くしてもらうのが、幸せだったんでしょう。

僕は逆に尽くされると肩身が狭くてたまらない…。」

「明良さん…」

「だから…心配しないで…。」

菜々子は、やっと微笑んで明良を見た。

明良はほっとしたように、菜々子に微笑み返したが、ふと真顔にな

って仰向けになった。

「でも時々考える時があります。結婚という形を取ってよかったかどうか…」

「！？…明良さん…」

今度は菜々子が、体を起こして明良を見た。

「僕は結婚して、あなたと家族になるのを望んだ…。姉が16歳の時に死んで、それから今まで家族がいなかったから…。だからあなたと家族になれたことに、幸せを感じています。」

菜々子の目から涙がこぼれた。明良は、天井を見たまま言った。

「でも…結婚したために、菜々子さんの仕事が減ったような気がするんです。そのことが申し訳ないな…って。」

菜々子は首を振った。明良は菜々子を見た。

「…だから罪滅ぼしというのかもしれませんが、できるだけ菜々子さんの言うとおりにしたいと思っています。あなたがビーフシチューを食べたいって言ったら作るし、どこかへ行きたいっていったら連れて行ってあげる。…僕も仕事がありますから、出来ないこともあります。出来なかつたら出来ないとはつきり言います。でも出来る限りのことはする。…それも僕の幸せです。」

菜々子は涙を堪えるようにして、明良の胸に自分の頭を乗せた。明良はその菜々子の頭を抱いた。

「…女優も辞めなくていいですよ。僕は菜々子さんのファンですか



ら、あなたがテレビから消えてしまつのは寂しいんです。」  
「…ありがとうございます。」

明良は体を起して、今度は自分がかぶさるように菜々子を仰向けにした。

「じゃ今度は僕から聞きます。…菜々子さんは今幸せですか？」

菜々子がうなずいた。明良は首をかしげた。

「声に出して。」

「…幸せ…」

その菜々子の言葉に、明良は微笑んで菜々子に軽くキスをした。

.....

翌日 夜 -

「ただいまー」

夫の声が玄関から聞こえた。キッチンにいた菜々子はあわてて玄関に向かった。そして「おかえりー」と言いながら、明良に向かって飛んだ。

明良が驚いて、菜々子の体を横抱きにした状態で受け止めた。

「今日、ロールキャベツ作ったの。」

「そ、そう…」

夫の様子が少しおかしいので、ふと明良の肩越しに後ろを見ると、

相澤が茫然として立っていた。

「あら！相澤さん……」

「俺、また別の日に来るわ。」

相澤がそう言っつて、慌てて玄関を出て行った。

「先輩！！」

明良が驚いて、菜々子を玄関に立たせると、

「先輩の分もある？」

と聞いた。菜々子がOKのサインを出すと、持っていたビジネスバッグを菜々子に押しつけ「先輩！」と言いながら、慌てて玄関を出て行った。

「あつ！火を止めてない！！」

菜々子は慌ててキッチンへ走った。

（終）

## 羨望

「明良さん！早くー！」

玄関で、ドレスアップした妻の菜々子が明良を呼んだ。

「待つて！ガス栓止めなきゃ！」

その明良の声に、一緒に玄関にいたマネージャーが、ついくすくすと笑ってしまった。

菜々子が笑いながら言った。

「明良さんていつもこうなのよ。独り暮らししてた男の人ってみんなこうかしら？」

「副社長は特別だと思いますよ。」

「そうよねー」

そう2人でクスクス笑っていると、タキシードを着た明良がやっと現れた。

「ごめん。遅くなって。」

「はい！おまじないやって！」

菜々子がそう言って、肩にかけているストールをすつと下げ、夫に背を向けた。

「え？今日は僕も一緒に行くから大丈夫じゃない？」

「だめ！やって！」

明良は苦笑して、菜々子の両肩にそつと手を乗せ、菜々子の首筋にキスをした。

「これでいいですか？」

明良がそういうと、菜々子は「ありがとう！」と言って夫に向いた。このおまじないは、菜々子が口説かれなという効果があるというが、実際にはどうかわからない。

元々は、独りでパーティーに行くことが多い女優の菜々子を、明良が見送る時に唇にキスができない（口紅がとれてしまう）ため、咄嗟に妻の後ろから首筋にキスをしたことが始まりだった。

菜々子が言うには、その日に限って、菜々子を口説く男が全くなかったらしい。（実は結婚してすぐだったため、皆、控えたものと思われる。）それから、肩を出すようなドレスを着る日は、おまじないと称して、首筋にキスをするようになったのである。

マネージャーは、この夫婦の仲睦まじさにはいつも当てられっぱなしである。最近は慣れたが。

……

パーティー会場につくと、もうかなりのゲストが来ていた。今回は映画監督の古希を祝う立食パーティーなので、大物俳優、女優等、芸能人のほとんどが集まっているともいえる。明良が呼ばれたのは、菜々子の夫であるということもあるが、相澤が事務所を立ち上げた時に、一番に主題歌の仕事を回してくれた大恩人でもあった。もうすぐ相澤も来るはずである。

「明良さん…香水の匂い…大丈夫？酔わない？」

菜々子が心配そうに明良に尋ねた。

明良は特異体質で、アルコール、睡眠薬、香料に極度に弱い。整髪料や香水の匂いでも酔ってしまうので、こういったパーティーはなるべく避けるようにしているのだが、今回はそういかなかった。

「会場がこれだけ広いから、大丈夫ですよ。」

「気分が悪くなったら言ってね。」

明良は、妻の腰に手を回して引き寄せる所作をして「ありがとう。」と言った。

…この2人の様子を、後ろのテーブルにいた、若い新人アイドルがじつと見ている。最近売れ始めたアイドルの少年だった。

(…なんか、むかつく…。)

少年は、明良も菜々子も知らなかったが、菜々子が会場に入ってきた時、一目ぼれのようなショックを受けたのだった。しかし、隣にいる明良が夫であることを知ると、急速に気持ちが冷めてしまった。…それでもやはり菜々子の美しさはまだ少年の心を捉えていた。明良がいわゆるハンサムなことも、更に少年を「ムカつかせて」いた。

…

パーティーが始まった。

監督の挨拶、主賓の挨拶、各有名人的お祝い等が何事もなく進んでいき、やっと乾杯となった。

乾杯が終わると、ゲスト達は各々テーブルを離れて、挨拶に動き出した。監督もそれぞれのテーブルに回っている。

（あいつ…お酒飲めないんだ。）

少年は、明良の持っているグラスを見てふと思った。

（飲んだら、どうなるのかな…実はすごく酒癖悪かったりして…）

もちろん少年のこれまでの経験にアルコール中毒などという文字はない。

少年はにやりと笑って、いたずらの機会を窺うことにした。

……

監督が明良達のテーブルに回ってきた。

明良と菜々子はグラスをテーブルに置いて、監督に体を向けた。そして「おめでとうございます。」と頭を下げた。

「今日は来てくれてありがとう。明良君、具合は大丈夫かい？香水の匂いがすごいけど…」

明良の体質を知っている監督が言った。

「大丈夫です。すいません。お気遣いいただきまして。」

明良が頭を下げた。

「いやいや…無理を言つてすまなかったね。…菜々子さん、幸せそうだね。」

菜々子は顔を赤くして「ありがとうございます。」と頭を下げた。

「相澤君は？」

監督が辺りを見渡して言った。明良と菜々子はびっくりして、同じように辺りを見渡した。

「さっきまで、ここにいたんですが…」

と明良は言つて「あ！あんなところに！」と目を遠くに向けた。監督と菜々子もそちらを向くと、相澤は名刺を配っている最中だった。

3人は笑った。

「さすがに商売上手だね。」

監督が笑った。明良は「監督に挨拶もしていませんのに、すいません」と頭を下げた。

「構わないよ。社長はあれぐらいでなきや。」

監督は笑いながら言った。

その後、2、3言葉を交わして、監督は次のテーブルへ移動した。

明良と菜々子はテーブルに向いて、ほっとした表情を交わした。

「監督、テーブル全部回るのが大変だろうな…」

「そうね。でもお元気な方だから…」

明良はうなずいて、自分のグラスを取った。グレープジュースであることを確認して、飲んだ。

「ねえ…明良さん…相澤さん、呼びもどした方がよくない？」

菜々子が自分のワインを持って、明良に振り返った途端、明良が崩れ落ちた。

「明良さん！？」

菜々子が驚いて、昏倒している明良の体をゆすった。

「明良さん！！」

周りのゲストがびっくりして、明良の傍へしゃがみこんだ。そして「誰か救急車を呼べ！」と口々に言った。

相澤がその騒ぎで気付き、こちらに駆け寄ってきた。

明良の息が荒い。意識はないようである。

「酒を飲んだのか！？」

その相澤の言葉に、菜々子は首を振った。

「…このジュースを…」

そう言つて、テーブルの上のコップをさした。まだ半分残っているが、確かにジュース用のタンブラーに紫色の飲み物が入っている。

その時、パンツスーツの女性が駆け寄ってきた。

「救急車じゃ間に合わない！早く胃を洗浄しなきゃ！」

そう言つて「鎌本！」と後ろを向いて声を上げた。「はい！」とい



う返事と共に、体格のいい男性が、明良の体を横抱きにして担ぎあげた。周囲が驚きの声をあげた。

相澤と菜々子が2人について一緒に走り出した。

……

青い顔をして呆然としている少年に、1人の男がすつと近づいた。少年が男を見上げると、男は明良が飲んだジュースの入ったタンブラーを持ち上げた。

「君だね。このジュースにワインを入れたのは。」

少年は思わず首を振った。

「しかし、ずっとあの夫婦の傍にいたのは君だけだよ。」

「……」

「このテーブルにある全てのガラスの指紋を取ればわかるんだけどね。任意だが、君の指紋も取らせてもらえるかな？」

男はそう言っ、タンブラーをテーブルに下ろすと、胸ポケットから黒い何かを取りだして、開いた。

「……」

警察バッジだった。金色のバッジが少年の目に飛び込んできた。

「これも任意だが、ちょっと話を聞かせてもらおうかな。」

少年はその場に凍りついたように動かなかった。

……

会場のホテルの一室のベッドに明良は寝かされていた。胸元は開かれ、呼吸も落ち着いていた。胃の洗浄が早かったおかげで、救急車には乗らずに済んだのだ。菜々子が明良の濡れた髪をタオルで拭いてやっている。

明良を助けたパンツスーツの若い女性は、この近辺を所轄している署の監察医で「鍋島」といった。一緒にいた「鎌本」というのは、捜査一課の刑事だと言う。

「おかげで助かりました。」

菜々子が目を腫らしたまま、2人に頭を下げた。横で相澤も一緒に頭を下けている。

「いえ……。これが仕事みたいなものですから。」

鍋島がそう言つて微笑んだ。心の中では（北条明良の体に触れた）などと喜んでいる。

「今日はお仕事で来られていたんですか？」

相澤が2人に尋ねた。

「いえ、監督とはちょっとした知り合いだったもので……。パーティーに呼んでいただいたんですよ。」

「そうでしたか……。それは申し訳ないですね。お仕事でもないのに……」

鍋島と鎌本は首を振った。

その時、明良が目を覚ました。

「明良さん！」

菜々子が先に気付いて、明良の胸に手を置いた。

「…やっぱり倒れてしまいましたか…」

明良がそう言つて、頭に手を乗せた。明良自身は香水の匂いでやられたと思っている。

「違うの、明良さん。たぶん、お酒を飲んじやったの。」

「！？え？…」

明良は体を起こした。あわてて体を抑える菜々子に「大丈夫だから」と言つて、座りなおし、鍋島達を見た。

「ご気分はいかがですか？」

鍋島が少し頬を染めながら、明良に尋ねた。

「この方たちが助けてくれたの。」

菜々子が涙ぐみながら言つた。

「…！！そうでしたか！…すいません。ご迷惑をおかけしてしまって…」

明良がそう言つて、鍋島の手を取り握つた。

鍋島は電流が走ったように、体を硬直させた。

「いっいえ……これも任務なので……」

「任務？」

相澤が「警察署の監察医さんだつてさ。」と言った。

「そうですか……。」

明良の見開いた目で見つめられた鍋島は（今度は私が倒れるかも）  
と思つたくらい、緊張していた。

「でも……すいません。こんな時にこう言うのもおかしいんですが……」

相澤が少し笑いを堪えるような表情で言った。

「？」

全員が相澤を見た。

「鍋島と鎌本って……なんか笑えるんですが……」

鍋島達は「ああ」と言つて、お互い顔を見合わせて笑った。

「よく言われるんですよ。「おなべ」と「おかま」ってね。」

その鍋島の言葉に、全員が笑った。菜々子も涙ぐみながら笑っている。

「それも、上司が「ノーマル」と言いましたね。」

と、鍋島が言うと、鍋島の遠く後ろにあるドアが開いて、男と少年が入ってきた。

「誰が、ノーマルだ。」

男がいきなりそう言ったので、相澤達が笑ってしまった。

「捜査一課の「能田」と言います。」

男がそう名乗って、頭を下げた。

明良達は頭を下げた。相澤などは、必死に笑いをこらえている。

「北条さんのグラスにワインを入れた犯人をお連れしましたよ。」

能田はそう言って、後ろにいる少年の背中に手をまわして、前へ押した。

5、6歩前へ出て、少年がうなだれている。  
菜々子が怒ったように、少年に背を向けた。

「おまえが……!!」

相澤はこの少年がアイドルだということを知っているようである。

「ほんのいたずら心でやったそうです。北条さんが特異体質だとは全く知らなかったそうで……」

能田がそう言うと、相澤は少年の前へ近づいた。少年は思わず後ずさりした。

その少年を逃がすまいと、相澤は少年の胸ぐらを掴んだ。

「先輩！」

明良がベッドから降りようとしたが、菜々子に抑えられた。

「お前な……！いたずらにも程があるぞ！こいつが死んだら、どうするつもりだったんだ……！」

「先輩……！知らなかったんですから……！」

「知らなかったにしろ、普通、飲めない人のグラスにアルコールを入れたりするか……？」

本当は相澤を止めないといけないのだが、刑事達は黙って見ている。それぐらいはさせてやれという様子である。

「ごめんなさい……！」

「ごめんですむか……！土下座して、明良に謝れ！」

「先輩……！やめて下さい……！」

菜々子が自分の胸に抱きつくようにしているため、明良は立ち上がろうにも立ち上がれなかった。

「君……僕はこうして助かったから、今回は許します。でも、二度とこういうことをやらないと約束して欲しい。」

明良はそう少年に言った。

少年はこくりとうなずいた。明良がほっとした表情をした。

「うなずくだけか……？謝れ……！」

相澤が胸ぐらを掴んだまま言った。

「先輩！手を離してください！」

相澤は明良にそう言われ、しぶしぶ手を離した。解放された少年の目からぼろぼろと涙がこぼれた。

「ごめんなさい…もうしません。」

泣き声でそう謝る少年に、明良は微笑んだ。

「もう帰っていいよ。」

明良がそう言うと、能田が後ろから少年の腕を取った。それを見た明良が慌てて言った。

「あの…彼は何か罪に問われるのですか？」

「ああ、いえ。北条さんが許したんですから、我々には出番がありません。」

明良がほっとした表情をした。

能田が少年に「行くぞ」と言っ、腕を引いた。

少年は、菜々子の後ろ姿を見た。首筋が小刻みに震えている。

菜々子は、最後まで少年に振りかえることはなかった。

……

少年と能田が出て行った後、明良は自分の胸に寄り添って泣いている妻の体をそっと離した。

「菜々子さん、もう泣きやんで下さい。」

鍋島のジョークのおかげでやっと笑顔を見せていたのに、少年の出現でまた菜々子の機嫌が悪くなってしまうている。

「笑って…菜々子さん。ねっ。」

明良がそう言つて、菜々子の唇に軽いキスをした。

それを見た、鍋島と鎌本はびっくりしている。

相澤が慌てて、明良達を隠すようにして、鍋島達の前へ進み出た。

「すみませんね。こいつらいつもこんな感じで…。後は若い2人に任せて出ましようか。」

お見合いの仲人のようなことを言つて、相澤は鍋島達を連れて部屋を出た。

…

部屋を出た相澤達は、パーティー会場へ向かった。

「ああ、いいなあ…。」

鍋島がうつとりとした顔でそう言つので、相澤と鎌本が不思議そうな表情で鍋島を見た。

「明良さんと菜々子さんのラブラブぶりですよ…。旦那さんは、ああいう風に、さわやかにラブラブできる人がいいなあ…」

「鍋島先輩自身がさわやかじゃなきゃ、無理じゃないですか？」

「私さわやかじゃないっての？」



「自分の胸に手を当てて、よく考えて下さい。」

鎌本はそう言うのと、思わず吹き出している相澤に「失礼します」と頭を下げて、走り出した。

鍋島も相澤に頭を下げ「鎌本！」と叫んで追いかけた。

「署に帰ったら覚えておけ！注射してやるー！！」

相澤はその2人を見送りながら笑った。

その時、能田が角から姿を現した。

そして走り去る2人を見て、眉をひそめ、相澤に苦笑して見せた。

「刑事さんも最近はコントやるんですね。」

相澤がそう言うのと、能田が笑った。

「お見苦しいところをお見せしまして。」

「いえ。ガチガチな刑事さんよりはいいですよ。」

相澤がそう言うて「あ、そうだ」と名刺入れを胸ポケットから出した。

そして、能田に名刺を差し出した。

「私、芸能プロダクションをやっています「相澤励」と言います。

またお世話になることがあるかもしれません。」

「これは、ご丁寧に。」

能田も自分の名刺を出して、お互い交換した。そして肩を並べてパーティー会場へ向かった。

「相澤さんと北条さんはアイドルユニットを組まれていましたよね。よくテレビであなた方を見ていました。」

「ありがとうございます。もう遠い昔のようですが…。」

「実は北条明良さんがデビューした頃に、命を狙われて刺された事件がありましたね。その時、私が担当になったんです。」

「ああ！あの時は僕は明良とは知り合っていなかったですが、その話は知っています。…そうでしたか…。」

「あの時も、北条さんは被害届を出さず犯人を許していた。…確か、彼はまだ20歳前だったと思うんですが…。」

「ええ。あいつのデビューは確か18でしたね。」

「若いのに、できた子だと思いましたよ。よろしくお伝えください。」

「ええ、必ず伝えます。」

相澤が言った。

……

「だからだな、明良。」

メッセンジャーの向こうから、明良は相澤に怒られていた。

「どこでもかしこでも、菜々子さんとああするから、今回のようなことになるんだ。」

「…すいません。」

明良は縮こまっている。

「場所をわきまえて、行動するように。」

「はい。」

「わかれば、よろしい。」

明良はただただ頭を下げている。

「あ、それでさ。あの能田って刑事さん。お前が命を狙われて刺された事件の担当だったらしいよ。」

「えっ！？…あの刑事さんですか！」

「お前のことを「できた人だ」とほめてたよ。」

「…そうでしたか…。」

明良は何か感慨深げに、下を向いている。

「よかつたら、あのおなべとおかまと一緒に、食事に行きましょうだって。」

「先輩、おなべとおかまつて…」

「だって、それノーマルさんが言ったんだもん。」

明良が大笑いした。

「能田さんですね。」

「ああ、そう言えばそうだ。」

2人は笑った。

「それで、菜々子ちゃんのご機嫌は直ったかい？」

「大丈夫です。パーティーは遠慮させていただきましたが、家に帰ってから落ち着きました。」

「また家に帰ってラブラブしてたんだろ。」

「！！！」

明良が顔を赤らめた。

「ま、家じゃ、俺は何も文句言えんな。今度は俺がお前のジュースにワイン入れるかもしれないから、気をつけろよ。」

「先輩!!」

相澤の笑い声と一緒にメッセージャーが切られた。

（終）

## 再会

捜査一課 能田班の部屋・

班長席に能田が座って資料を読んでいた。

「あー…目がかすむな。」

前の席でパソコンを操作している、監察医の鍋島が「老眼ですかー？」と振り向かずに行った。

「うるさい。私はまだ35だ。」

と能田が言い返した。

「それより、監察医のお前がなんでここにいるんだ。自分の部署へ戻れ。」

「だって、ネットできないんだもん。」

「うちは、ネットカフェか！」

その能田の言葉に、鍋島は思わず笑った。

「おかまはどこ行った？」

「?…さあ？」

鍋島はあたりを見渡した。

「誰がおかまよ！鎌本でしょうっ!？」

その裏声と同時に、鎌本が部屋へ入ってきた。

「やめてそれ。もう飽きた。次からは別バージョン考えておいて。」

鍋島が言った。鎌本は椅子に座り、真面目に悩みだした。

「おい、おなべ。」

「なあに？」

鎌本が答えた。

「おかまじゃなくて、おなべの方。」

「なんです？」

鍋島が答えた。これもお決まりだ。

「お前、友達大丈夫か？」

「…ああ…落ち着いたとは思っていますが…」

友達とは、先日、彼氏に振られて、自殺未遂をした舞のことだった。といつても、大した怪我じゃない。

たまたま、鍋島が訪れたので、軽い手首の傷で済んだのだった。

「しばらく、様子を見てやった方がいいんじゃないか？」

「かといって、四六時中一緒にいることもできませんしね。」

「まあそうだな…」

その時、鍋島の携帯がなった。

「！舞からメール…」

能田が資料から目を離して、鍋島を見た。

「…なんだか…遺書のような…」

その鍋島のつぶやきに、能田が「行って来い」と言った。鍋島はためらっている。

「でも…個人的なことですし…」

「そんなこと言ってる場合か！鎌本、バイク出せ。」

「はい！」

鎌本が部屋を飛び出した。鍋島は能田に頭を下げ、後を追った。

・・・

鍋島達は、舞の家についた。鍵は開けっ放しになっていた。飛び込んだが、誰もいない。

「どうということ？」

鍋島が息を切らしながら、頭の中を整理しようとした。鎌本もどうすればいいかわからない。

その時、鍋島の携帯がなった。慌てて開くと、能田からだった。

「相澤プロダクションへ行け！舞かどうかわからないが、刃物を持った女の子が入ったって相澤社長から電話が…」

「相澤プロダクション！？…どうしてそんなところ…」

鎌本が驚いている。鍋島は部屋を飛び出した。鎌本も後を追った。

相澤プロダクションのビルの前に、鎌本はバイクを止めた。警察も救急車も来ていない。

鍋島は不審に思ったが、バイクの後部座席から飛び降りて、中へ入って行った。

「！！北条さん！」

鍋島が驚いて、思わず声をあげた。明良が鍋島を見て一瞬微笑んだが、すぐに顔をゆがめた。

明良の手首にタオルが巻かれている。しかしそのタオルは血だらけになっていた。相澤が新しいタオルを上から巻きながら「車はまだか！」と叫んでいる。

「舞が！？…舞がやったんですか！？」

「あの子は舞って言うんですね。」

明良が痛みを堪えながら言った。

舞は、警備員に押さえられていた。

「舞！？」

鍋島が舞に近寄った。

「あんた、どうして北条さんを！？」

「違うの！あの人を刺そうとしたんじゃないの！」

「！？」



舞がそう言つて暴れだしたので、警備員達が必死に抑えた。  
鎌本は、明良にソファ―に寝るように指示している。

「心臓の方を下にして下さい。でないと出血が収まりません。」

明良はうなずいた。そして鎌本に支えられて体を横たえた。明良の息遣いが荒くなっている。

「救急車遅いな…」

鎌本がそう呟くと、相澤が首を振って言った。

「呼んでません。」

「呼んでない!？」

その時、車が来たと事務員が走ってきた。  
相澤が鎌本に言った。

「とりあえず、明良を病院へ連れて行きます。お話は後でも構いませんか？」

「それは構いませんが、どうして救急車を呼ばなかったんですか？」  
「いや、明良がね。大げさにしない方がいいんじゃないかって言うものですから…。それで能田さんにお電話したんです。」

明良が体を起こした。鎌本があわてて体を支えた。「すみません」と明良は言い立ち上がった。

「明良…歩けるか？がんばれ…」

受付嬢と相澤に支えられながら、明良はビル前に用意された車に歩き出した。

「あの子、行かせないで！」

舞が暴れながら、明良を車に乗せようとしている受付嬢を指さして言った。

「あの子が私の彼を取ったのよ！」  
「!？」

受付嬢は驚いた表情で舞を見た。舞の言葉を聞いた相澤は「一緒に乗れ」と言った。受付嬢はうなずいて、明良の後に乗り込んだ。

相澤は助手席に乗り、運転手を促した。

舞が叫ぶ中、車は走り去って行った。

舞は相澤プロダクションの会議室に、警備員と鍋島、鎌本と一緒にいた。  
しきりに泣いている。

「あんた…なんてことしたの…。あの受付の人を殺そうとも思っただの？」

舞はうなずいた。

「それで、一緒に死のうと思ったの。」

鍋島が、頭を抱えた。

「北条さんを刺したのはどうして？」

「私…何もないような様子で、このビルに入ったの。そしたら入口のところで、あの北条って人が通りすがりに、私に何か呼びかけたの…。私がびっくりして返事をしたら、そのポケットに隠しているのは何？って聞いたの。」

「!？」

その時、舞は上着のポケットに小さな果物用ナイフを隠していた。…明良は、そのポケットの膨らみ具合からそれに気づいたらしかった。舞は咄嗟にそのナイフを取り出して、受付嬢の方へ向かおうとしたが…。

「あの人が、私の腕を掴もうとしたから、咄嗟に腕を振ったら、あの人の手首にナイフが食い込んだのがわかって…。」

鍋島は、目を手で覆った。

「それなのにあの人、すごい力で私の腕を抑えて…。そしたら、警備員の人に来て…。」

舞がそこで黙り込んだ。

「…あんな大怪我負って、救急車も警察も呼ばないなんて…」

鍋島が呟くように言った。

「…北条さんの心遣いには悪いけど…あんたには自分のした事への責任をとってもらわなきゃ。」

鍋島がそう言って鎌本を見た。鎌本はうなずいて手錠を出し、舞の

手に掛けた。

……

翌日、鍋島と能田が相澤プロダクションを訪れた。

受付嬢が、少しうつむき加減に、鍋島達を副社長室に案内した。

「あの子の事、気にしないでね。」

鍋島が、そつと受付嬢の背にささやくと、受付嬢が小さくうなずいたのがわかった。

受付嬢は副社長室のドアをノックした。

明良の「はい」という声がした。

受付嬢は少し涙声で「能田様と鍋島様がお見えます。」と言った。

「ああ、どうぞ！」

その元気な声に、能田達はほっとした表情をした。そして受付嬢がドアを開けた。

明良が立って待っていた。そして2人に頭を下げた。

「わざわざありがとうございます。どうぞ。」

明良はそう言って、来客用のソファを右手で指した。左手に包帯を巻いている。その手が少し青白く見えた。

それを見た鍋島の胸が、ずきりと痛んだ。

2人は、明良に頭を下げて、勧められるまま椅子に座った。

「傷はどうですか？」

能田が心配そうに尋ねた。

「大丈夫です。縫った針の数は多いようですが。」

「…本当にごめんなさい…」

「鍋島さんがどうして謝るんです？」

明良が微笑んで言った。しかし、ふと表情を暗くした。

「…あの子は…結局逮捕になったんですね。」

「北条さんのお気遣いに背く形になってしまいました。ほっといたら、また何をしでかさかわからないと、鍋島が判断したんです。」

能田が、涙ぐんでいる鍋島の代わりに言った。

「そうですか…鍋島さんも、お辛かったですよね…。」

明良がそう言っ、鍋島を見た。鍋島が涙に言葉を詰まらせながら言った。

「…本当にすいません。…まさか、こんなことになるとは思わなくて…」

「鍋島さん。僕の事は別に構いませんが…」

明良が微笑んで言った。

「あなたの気持ちは、舞さんに伝わっていると思いますよ。」

鍋島は一層、言葉に詰まった。

能田は（この人は変わらないな…）と思っていた。すると明良がふと思い出したように能田に向いた。

「あの、能田さん…。相澤から聞いたんですが、私が刺された時の事件を担当されていたとか…。」

能田は驚いた表情をしたが、少し照れくさそうに「ええ」と答えた。

「もしかして、あの時病院に事情聴取に来られた刑事さんですか？」

能田が微笑んだ。めつたに笑わない能田が微笑んだ顔を見て、鍋島は心の中で驚いていた。

「そうです。」

「やっぱりそうですか！」

明良がそう言って、右手を差し出した。能田も手を出して握手した。

「すみません。あの時もお名前をお聞きしていたとは思っていますが、すっかり失念してしまっ…。」

明良の言葉に、能田は首を振った。

「…もう10年…いや、18だったから、12年ですか…。」

明良が感慨深げに言った。能田もうなずいた。

「時の立つのは早いもんです。あれから、ずっとあなたが活躍されているのをテレビで見えていますね。」

「！…それは…ありがとうございます。」

明良は少し照れくさそうにした。

「まさか、こうしてお話できるとは思いませんでしたよ。」

「…私もです。」

明良も能田も感慨深げに微笑みあった。

・・・

帰りの車の中で、鍋島は能田から、明良が刺された事件の事を聞いた。

明良はその時まだ18歳だったが、両親も唯一の親族だった姉も亡くして、独りで暮らしていたそうだった。

明良を刺したのは、同じ18の息子を持つ父親で、その息子が大学受験に失敗したことを苦に自殺未遂をし、意識不明の重体となっていた。

犯人はその時、デビューして間もない同い年の明良の人気が出ていることに逆恨みし、明良のステージを壊すよう細工し、そのため怪我をした明良が入院している病院で命を狙ったりしたのだという。

能田はその時、病院で明良に事情聴取をしている。その時に見た明良の顔は、とても子どもっぽいように見えた。

しかし事情聴取の時点で、明良は犯人がわかっていたらしかった。だが能田はそれを見抜けなかった。あの時見抜いていたら、もしかすると明良は刺されなくて済んだかもしれない…と能田は今でも悔やんでいる。

が、明良は犯人が捕まるのを望んでいなかった。その上、明良は刺される前に、匿名でその犯人の意識不明の息子に、花束を贈っていた。

る。

「…よくできた子だと思ったよ。」

能田が運転しながら話を続けている。

「明良君が退院した後、犯人は明良君を公園まで追いつめてとうとう刺した。結局、犯人は自首してきたが、明良君の身の上と気持ちを知って、犯人は警察署で泣き崩れていた…。その姿は今も目の奥に残っているんだ。明良君は刺された瞬間に「姉さん」と言ったんだそう。それを聞いた時、私まで涙が出たよ。…もしかすると死んでお姉さんのところへ行くつもりだったのかも知れない。」

鍋島が涙ぐんだ。

「結局、彼は助かった…。そして被害届を出さなかった。…最後までやられたと思ったよ。…そこから私もいろいろ考えるようになってね。厳しくするばかりが、罪を償わせることにならないんじゃないかって…。」

鍋島は能田の顔を見た。

「私はテレビで彼の成長する姿を見ていた。引退すると知った時は心配したが、監督のパーティーで、奥さんと一緒にいる彼の元気そうな姿を見た時…彼が生きていてくれてよかったと、親のように嬉しかったのを憶えてる。」

鍋島は、本当に嬉しそうにしている能田の顔を見た。普段、表情が変わらないだけに、本当に能田が喜んでいることがわかった。



「あ、それでなんだ！」

鍋島が突然声を上げたので、能田は眉間にしわを寄せた。

「急に大声を出すな。」

「すいません。監督のパーティーの時、北条さんのグラスにワインを入れた犯人がどうしてわかったのかな…って、すごく疑問に思ってたんですけど、ずっと北条さんを見ていたからなんです。」

「ん…まあ、そうだ。」

「…まあ…って？」

「実は、奥さんの方を見ていた。」

「！？」

「綺麗な人だなあって、ついつい…そしたら、あの夫婦の傍で、あの少年がうろろしているからおかしいなと思ってた。でも、まさかワインを入れていたとは思わなかったがね。明良君が倒れて急性アルコール中毒だったってわかった時、もしかして…と思って、誘導尋問したんだ。」

「…能田さんって、おかまとかおなべとかが好きじゃなかったでしたっけ？」

「好きだ。」

能田が真面目に答えるので、鍋島はつい笑った。

「でも、奥さんに見惚れるということは…ノーマルですね。」

「あんな、鍋島。」

ここで、鍋島はしまったと思った。しかしもう遅い。

「おかまとおなべがノーマルじゃないという考え自体がおかしいんだ。世の中にはノーマルもアブノーマルもなくってだな…」

この説教は多分、鍋島の家に着くまで続くだろう。…あと1時間は  
覚悟しなければならぬ。  
鍋島はため息をついた。

（終）

## 発熱

「ただいまー！」

夜8時 -

菜々子が帰ってきた。

「明良さん？…菜々子ですよー…3日ぶりですよー？」

いつもなら明良が出迎えてくれるのに、返事もない。

玄関の電気がついていたので、てっきり明良が先に帰ってきている  
と思っていたが…。

「いやだわ…電気つけたまま、仕事にいつちゃったのかしら…」

正直、明良も事業が軌道に載ってきたらしく、忙しいようである。

「…おみやげ…買ってきたのに…」

菜々子はドラマの撮影で、伊勢に行ったのだった。

「もう！…仕事なら仕事って連絡してくれたらいいのに…」

菜々子はそうふてくされながら、リビングに入った。

荷物をソファーに置き、寝室のドアを開けた。

電気をつけて、菜々子は「きゃっ！！」と声を上げた。

「もおっ！！明良さん、いるんじゃない！！！」

明良が洋服のままで、ベッドに寝ていた。  
よっぽど疲れているのか、菜々子に気付いていもない。

「もう！明良さん！…起きてよっ！…！」

菜々子がそう叫ぶように言うと、明良ははっと目を覚ました。

「あっ！えっ！？…あ、すみません。菜々子さん…お帰りなさい！」

明良が飛び起きるようにして体を起こし、言った。

「ひどーい！！私に気付かないなんて…」

「ごめん！…このところ徹夜が続いてて…ごめんね。菜々子さん。」

明良はそう言って、ベッドから立ち上がった。

が…急にめまいを起こしたように、その場に座り込んだ。

「明良さん？」

菜々子が驚いて、明良の背中に手を当てた。

「！？…明良さん！…体が…」

「ああ、大丈夫大丈夫…。さっき薬飲んだから、もうすぐ効いてく  
ると思う。」

明良がそう言って立ち上がった。

「…すごく熱いじゃない！」

菜々子はその明良の体を、ベッドに押し倒すようにして寝かせた。

「大丈夫だつて！」

「大丈夫じゃないの！！」

菜々子はそう言うと、明良の首元に頬を当てた。

「かなり熱い…。…明良さん本当にお薬飲んだの？」

「ええ…本当についさっき…最後の一包を飲んだところなんです。」

明良は特異体質で、市販の薬は漢方薬以外飲めない。熱を出した場合は、熱さましはもちろん、普通の風邪薬すら飲めないので、必ず内科に行つて、体質にあつた薬をもらわねばならなかった。

「とにかく、ベッドに寝てて！」

菜々子は明良の体をベッドに押し倒した。

「菜々子さん…あの…」

「今、起きたら、1週間キス禁止！」

その菜々子の言葉に、起き上がろうとしていた明良は、あわてて体を横たえた。

「今、氷枕持ってくるから。」

「…はい…」

明良はおとなしくしているしかなかった。

……

「えっ！？明良、熱出したの！？」

携帯の向こうで、相澤が言った。

「そうなんです。だから明良さん、しばらくお仕事休ませてもらうと思つて…。」

菜々子が言った。

「それは、もちろん。…薬はあるの？あいつ、市販無理だろう？」

「ええ。明日、いつもお薬をいただいてるお医者様のところについて、もらつてこようと思つています。」

「菜々子ちゃんは、お仕事は？」

「今、一段落したところなので、大丈夫です。」

「そうか…でも、あんまり明良に近寄るなよ。」

「？…どうして？」

「風邪が遷ったら、菜々子ちゃん、次の仕事取れないだろう？」

「…まあ…そうですね…」

「明日、姉貴行かせるから、菜々子ちゃんは別の部屋で休んで。」

「…そんな…百合さんに申し訳ないです。」

「しばらく会つてなかったから喜ぶと思うよ。とにかく菜々子ちゃんは風邪遷されない様にするんだよ。キス禁止ね。」

さつき、明良に言ったことと同じようなことを言われて、菜々子は苦笑した。

……

翌日、百合が本当に来てくれた。

「百合さん、ごめんなさい。…わざわざこんな。」

「何言ってるの！菜々子さんは休んでてね。昨夜、明良君の傍にいなかったでしょうね？」

「…はい…」

菜々子は明良が心配で、本当は傍にいたかった。

だが、明良が「風邪が遷るといけないから」と、部屋に鍵をかけてしまっていたのだ。

客間が別にあるので、そこで菜々子は寝たが、正直、安心して眠れなかった。

百合が、寝室のドアをノックして「百合だけど入れてー」と言った。すぐにドアが開いて、百合は入って行った。

何か菜々子の心に寂しさが募った。

…

明良の薬を取りに行くのも、百合が許さなかった。

「病院って、病気の巣みたいなものだから、菜々子さんが遷ったら大変。」

と言って、菜々子を置いて行ってしまった。

菜々子は、寝室のドアをノックした。

「明良さん？具合はどう？」

しかし、中から返事はなかった。眠っているのだろう。

菜々子はドアにもたれて、うなだれた。

……

翌日、菜々子に仕事の電話が入った。

番組対抗のクイズ番組があるという。

菜々子は「別に自分じゃなくてもいい」と言っで、断った。収録は先だが、何か明良のことが気になって、仕事をする気がなかったのである。

それを聞いた百合が驚いていた。

「菜々子さん、駄目よ！…明良君が逆に怒るんじゃない？」

菜々子ははっとした。

「…でも、もう断ってしまったし…」

「菜々子さん、気持ちはわかるけど、明良君は子どもじゃないから大丈夫よ。菜々子さんは女優のお仕事に集中して。その方が明良君が喜ぶんじゃない？」

「…はい…」

菜々子は寂しげに返事した。

……

その夜、百合が帰って行ったあと、菜々子は寝室のドアをノックしてみた。

「明良さん、具合はどう？」

「大丈夫です。」



と返事があつたが、その後に咳き込んでいる声がした。

「！明良さん！」

「…大丈夫、大丈夫…。菜々子さん、早く寝なきゃ。」

明良の声がかなり囁れているのがわかる。

「明日も仕事はないから、いいのよ。」

「…でも、いつ仕事が入るか分からないじゃないですか。早く寝て下さ…」

そこで、また明良が咳き込んだ。

「明良さん！」

「…おやすみ…菜々子さん。」

必死に咳を止めながら、明良が言った。

菜々子の中で、何かが切れた。

「明良さんのばかっ！！」

菜々子はそう言うと、傍にある電話台を持ち上げ（もちろん電話は音を立てて落ちてしまう）、ドアノブに叩きつけた。

大きな音がして、ドアノブが壊れ落ちた。

菜々子がドアを押しあけると、明良がびっくりした表情でこちらを見て、起き上がっている。

「菜々子さん！…どうしたんです…」

噎れた声で明良が言った。

菜々子は明良の体に抱きついた。

「だめです。風邪が遷ったら…」

「私は、明良さんの妻なのよ!!」

「!!」

「みんなして、仕事仕事って…。私、女優だけど、その前に明良さんの妻なの! 北条菜々子なの!!」

「…菜々子さん…」

明良の驚いた表情が、微笑みに変わった。菜々子はそれに気付かないまま、明良の肩に顔を埋めて泣いている。

「なのに…妻なのに…何もできないなんて…」

「菜々子さん、ごめん…。泣かないでください。」

明良はそう言って、菜々子の体を持ち上げて、横抱きするようにして座らせた。

「女優じゃなくても、やっぱり風邪を遷すわけにはいかないですよ

…。」

「……」

菜々子は明良の顔を見つめた。そして、突然明良の首に抱きついて、キスをした。

「!!」

明良は一瞬、菜々子の腕を掴んで体を離そうとしたが、すぐに力を

抜いた。

2人はしばらくそのまま離れなかった。  
やがて、菜々子の方から唇を離した。

「…これでもう…遷ったわよね。」

「菜々子さん…」

「一緒に寝てもいいわよね？」

明良が笑いながら、菜々子の髪を撫でた。

「負けましたよ、菜々子さん。」

「じゃ、も1回！」

「…！」

明良は菜々子に押し倒されるようにして、再び唇を奪われた。

…

翌朝 - -

百合が寝室のベッドの前で仁王立ちしていた。

「…明良君…なんでこうなっちゃったの？」

「…すいません。」

体を起こしている明良の横で、菜々子が赤い顔をして寝ていた。完全に風邪が遷ってしまっている。

「…ドア壊されたので…」

「…ついでに言うなら、電話機も壊れてるけど…。でもいい訳にはな

らないよね?」

「……」

「とにかく、2人とも治るまで、キス禁止!!」

「えーっ!?!?」

明良がそう言うと、

「えーっじゃないっ!!」

と百合の雷が落ちた。そしてドアがバタンと閉まった。(鍵はできないが)

菜々子がそつと目を開けて、両手を明良に差し出した。

明良はふとドアを見てから、菜々子の体にそつとかぶさった。

(終)

## 勇退

明良は、ソファーに座っている菜々子の膝を枕に寝ていた。

そうやって一緒にテレビを見ていたのだが、菜々子がふと気付くと、明良は寝入ってしまったている。

「あらま」

菜々子はそう言い、明良の目にかかっている前髪をそつと払ってやった。

そして「困ったわね。」と呟いた。

ずっとこのままにいるわけにはいかない。

（起こすの可哀想だな…）

最近、明良が副社長をしている「相澤プロダクション」の業績がよくなり、明良も忙しくなってきた。

別の事務所にいる女優の菜々子との休みが合わず、一緒に食事をする時間もなくなってきた。

今日は久しぶりに、顔を合わせられたというのに…。

（このまま寝ちゃおうか。）

菜々子はそう決めると、ソファーのリモコンを取り、ゆっくり背もたれを倒した。電動ソファーは本当に便利だ。

テレビを消し、ライトもリモコンですべて消した。

明良の心地よさそうな寝息が、闇の中に静かに響いている。

（仕事…辞めようかなあ…。家にいるくらい、ゆつくりさせてやりたいし。）

菜々子は別に女優の仕事に固執していないが、明良が辞めるなど言う。相澤プロダクションに伴優部門を作るという案も、今のところお預けのようだ。

「あれ？」

明良の声がした。目を覚ましてしまったらしい。

「菜々子さん？」

「ん？」

「ライトつけて。」

「んふふ。このままでいいじゃない。」

「よいしょ。」

膝に重みがなくなり、明良が起き上がったのを感じた。そして唇に何か温もりを感じた。明良が口づけているらしい。

「もっ…。」

唇が離れたのを感じて、くすくすと笑いながら菜々子が言った。そして、傍に置いていたライトのリモコンを探り取って、ライトをつけた。

一瞬、まぶしさに目がくらんだ。

「あー…寝ちゃってたんだ…」

明良が頭を抱えるようにして、言った。

「どうする？シャワー浴びて、もう寝る？」

「ん… シャワーは朝にするよ。着替えて寝る。」

「明日、何時に起きるの？」

「6時。」

「早いよね。」

「9時に女の子をスタジオに送ってやらなきゃならないんだ。その前に、先輩との打ち合わせがあるし…」

「副社長の明良さんが送るの？その子マネージャーは？」

「一応つけてるけど、時々、本人の希望とか悩みとか聞いてやらなくちゃならないからね。」

「それこそマネージャーでいいじゃない。」

「マネージャーを介すと、マネージャーの都合のいい話しか、僕らに届かないから。だから、時々こつやって直接送り迎えするんだ。」

「相澤さんもするの？」

「いや、これは副社長の仕事。」

「…心配だわ…」

明良は、ふと菜々子に向いた。

「何が？」

「浮気したら嫌よ。」

明良が笑った。

「するわけないでしょ。」

明良はそう言って、また菜々子にチュツとキスをした。そして立ち上がって伸びをすると寝室に向かって行った。

（明良さんより、その女の子達が明良さんに惚れないか心配なんだけどなー…）

菜々子はそう思いながら、立ち上がって寝室に向かった。

……

すぐに菜々子の不安は的中した。

翌日、明良が夜10時頃になって帰ってきた。「ただいま」という声もないので、テレビを見ていた菜々子は気づかずにいる。ただ、廊下の方で足音が聞こえ、夫が洗面所に行ったのを感じた。

「明良さん？」

菜々子があわててリビングから出て、洗面所に向かった。

明良が顔を洗っている。そして、コップに水を入れると口に含んでゆすいでいる。

「どうしたの？明良さん。…ただいまも言わないで。」

水を吐いて、タオルで顔を拭いている明良の背に菜々子があった。すると明良が突然菜々子の体を横抱きにして、寝室へ向かった。

「ちょ、ちょっと、明良さん？」

明良は何も言わずに菜々子の体をベッドに下ろすと、その上からかぶさってきた。

…そしてそのまま動かなくなった。



「明良さん？…どうしたの？」

明良は菜々子の上にかぶさったまま、顔を横にして黙っている。

「何があつたの？」

「キスされました…」

「！？え？」

「…キスされちゃいました…」

菜々子は（あー…やっぱり…）と思った。

「誰に？」

「新人の女の子。」

「どこで？」

「車の中です。…仕事が終わって家まで送ったんですが、見送るために車を降りようとした時にしがみつかれて。」

「…助手席に座らせるからよ。」

明良がびっくりしたように半身を上げた。

「！…そうか！」

「もお…明良さんって、そういうとこ抜けてるから…」

そこがまたいいんだけど…と思ったが、それは口に出さなかった。明良はふたたび体を下ろした。ここちよい重みが、菜々子の体にかかった。

「あー…僕はほんとに…」

「明良さん…あなたは、自分が思ってるよりもてるんだから、ちゃんと自覚して。」

「はい。」

「今度から、女の子は後部座席にさせるのよ。」

「…はい。」

明良の返答に菜々子はおかしくなって笑った。

「ただ、1つ問題が。」

「どうしたの？」

「写真週刊誌のカメラマンに写真を撮られちゃいました。」  
「！！！！」

そっちの方が一大事じゃないの…と菜々子は思った。

「写真週刊誌！？また、すごいタイミングじゃないの！」

「…たぶん、待ち伏せされていたんだと思います。」

「…ということは？その女の子が仕掛けたってわけ？」

「…でしよっね。」

「相澤さんに連絡した？」

「はい。」

「相澤さんはなんて？」

「お前が襲ったのかって…」

菜々子は思わず笑ってしまった。

「相澤さんどこまで本気かわからないわね。それで？」

「違いますって言ったら、じゃあ大丈夫だって。」

「大丈夫？」

「ええ…。例えば、僕の方から体を乗り出していたら「プロダクション副社長、新人アイドルを襲う」みたいな感じでスクープになるけど…」

菜々子は再び笑ってしまった。

「逆に女の子の方が乗り出しているなら、そんなのスクープにもならないって。写真週刊誌も馬鹿じゃないから、そんなの載せたって仕方ないことはわかるはずだって言うんです。」

「…確かにそうね…」

「ただ、ネットの方が怖いと。」

「!?!」

「ネットで、画像を細工されて流された方が怖いから、そっちを警戒しようって言うてました。」

「…なるほどね…」

「でも、僕と菜々子さんの仲は皆知ってるから、さほどスクープにはならないよ…って、なぐさめてくれたんですけど…」

菜々子はくすくすと笑った。

「…それよりも僕は…もうちょっと、菜々子さんに嫉妬されたかったです。」

「!?!」

明良のその言葉に、菜々子は声を出して笑ってしまった。

「ごめんね。…でも、いちいちそんなことで嫉妬したら、私の神経が持たないわ。」

「………」

「明良さん？」

明良の返事がない。菜々子は驚いて、明良を抱くようにして背中を軽く叩いた。

「どうしたの？怒っちゃったの？」

明良の寝息が聞こえた。安心したのか眠ってしまったらしい。

「…なんだ…びっくりした…」

菜々子は微笑んで、枕元にあるライトのリモコンを取り、電気を消した。

・・・

翌朝、菜々子は明良と一緒に相澤プロダクションに向かっていた。

「私もどうして一緒に行くの？」

車の中で、菜々子が運転している夫に尋ねた。

「さあ…先輩が菜々子さん連れて来いって言うから…」

「ふーん？」

プロダクションビルの地下に車を止め、エレベーターに乗り、社長室に向かった。

廊下で稽古着の若い子たちが、明良に挨拶している。

（まあ、結構たくさんいるのね。）

明良は微笑んで挨拶を交わしていたが、ある緊張気味な女の子の顔を見て表情を硬くした。

「…おはようございます。」

女の子は丁寧に挨拶していたが、明良は無視して通り過ぎてしまった。

（あの子ね…。）

驚いたように振り返っているその女の子の顔を見て、菜々子はちよつとその子が可哀想に思った。

「ねえ…明良さん…」

明良の背中に、菜々子は声をかけた。

「何です？」

「おとなげないわよ。」

「……」

明良は黙っていた。

・・・

「菜々子ちゃん、ごめんね。急に呼んで。」

相澤が言った。

「いえ、仕事もなかったですから…」

「どうぞ、座って。」

相澤に勧められるまま、菜々子はソファに座った。

明良は菜々子に背を向け、片方のポケットに手を入れたまま、社長席の後ろにある窓のブラインドを開けて外を見ていた。

（まださっきの女の子の事怒ってるのかしら…）

菜々子はそう思った。

「あのね。菜々子ちゃん。」

「ええ。」

「菜々子ちゃん、このプロダクションの役員にならない？」

「え？」

菜々子はその相澤の言葉に驚いて、ふと窓の外を見ている夫を見た。夫は外を見たままである。

「…明良はさ…反対みたいなんだ…。だって菜々子ちゃん、女優を辞めなきゃなくなるだろう？」

「ええ…まあ…今の事務所は辞めなくちゃいけませんものね。」

「ここに俳優部門も作るうかと思ってるけど、簡単に作れるもんじやないって明良は言うんだ。」

「私もそう思います。」

「…でも俺としては、明良と菜々子ちゃんに、一緒に仕事をして欲しいんだ。」

「…相澤さん…」

「昨夜の話聞いた？」

菜々子は思わずクスッと笑った。

「明良さんが襲われた話？」

「そうそう。」

相澤も笑った。

「実は前々から菜々子ちゃんに来てもらって話してたんだけど、明良はどうしても首を縦に振ってくれない。で、昨夜あんなったじやない。菜々子ちゃんがうちにいてくれば、ああいうこともなくなると思うからって、今朝電話で言ったら、明良が直接本人に聞いてみてって言うからさ。」

（なんだ…知ってて呼んだんじゃない。）

菜々子はそう思った。夫は背を向けたままだ。

「ちょっとすぐにはお返事できませんけど…前向きに考えてみますわ。」

「ほんと!？」

相澤が嬉しそうに言った。明良が驚いた表情でこちらに振り返った。そして慌てたように駆け寄ってきて、相澤の隣の椅子に座った。

「菜々子さん!」

「明良さん…あのね…。ここの役員になるかどうかじゃなくて…私、もう女優に固執していないのよ。」

「!?!」

「明良さんの気持ちは嬉しいけど…。私もいろいろと限界を感じているの…。明良さんもその気持ちわかってくれるわよね。」

「……」

明良は困ったように下を向いた。

帰りの車の中では、明良と菜々子に何か気まずい空気が漂っていた。

「…明良さん？」

「何ですか？」

明良はにこりともせずに運転している。

「…怒らないでよ。」

「…怒ってはないですけど…どうしたらいいのかわからないんです。」

「……」

「菜々子さんが相澤プロダクションに来ることが、本当にいいことなのかどうか…」

「私と一緒に仕事するのは嫌？」

明良は首を振った。

「そんなことはないですけど…。」

菜々子はほっとした。

「でも…本当に女優の仕事を辞めていいんですか？」

「いいわ。」

菜々子は即答した。

「正直、役員とかじゃなくて、あなたの秘書がいいの。公私ともに、



あなたのサポートができたらいいと思ってる。」  
「！！！」

明良が驚いた表情で菜々子を見た。が、慌てて進行方向を向いた。  
運転中によそ見は危ない。

「そんなにびつくりしないで。…前も言ったけど、私はあなたの妻  
なのよ。」

「菜々子さん…」

明良は、微笑みながら感慨深げに小さく首を振った。少し涙ぐんで  
いるように見えた。

・・・

それから1ヶ月後、菜々子は女優を辞めた。「一人の名女優が消  
えた」と惜しまれたが、潔い引退に賞賛の声が多く上がっていた。

（終）

## 覚悟（最終話）

「だから菜々子さんに役員は…」

「務まらないってのか？」

「そうじゃ、ありません。」

朝 -

相澤と明良が、社長室で言い争っている。

「…今、経営が順調だからいいですが、もし会社に何かあった場合、菜々子さんにまで経営の責任を負わせることになるんです。」

「…!…」

その明良の言葉に、相澤は（さすがだな）と思った。明良は事務所の倒産を経験している。

「それもそうか…」

相澤が突然素直になったので、明良は少し拍子抜けした。

「…でもなあ…お前の秘書というだけでは、経営に参加してもらえないよ。…菜々子さんには、女子のまとめ役になって欲しいんだ。」

「…それはわかりますが…」

「ただの「部長」とかで収めたくないし…。」

「おはようございます。」

ドアがノックされ、菜々子の声がした。

「おはよう！菜々子ちゃん、入って！」

相澤が言った。

「おはようございます。」

菜々子が部屋に入ってきて、頭を下げた。

明良が気まずそうに、菜々子を見た。

ちゃんとタクシー代を置いていつてはいたが…。

「…おはよう…菜々子さん…」

「明良さん、ひどいわ。…どうして先に行っちゃうの？」

「…すいません…。先輩と話があつて…」

「私を役員にするかしないかって話のことね。」

「！」

相澤と明良が驚いて菜々子を見た。

「昨夜、明良さんがずっと目を開けたままだったから、気になっていたんだけど…」

「！…お前、寝てないのか？」

相澤が明良に言った。

「…いや、朝方には寝ましたよ。」

明良は菜々子がすっかり寝ていると思っていたので驚いていた。

「すいません、菜々子さんまで起きてたんですね。」

「肌が荒れちゃうわ。」

菜々子は笑ってそう言い、明良の隣に座った。

「相澤さん…じゃなくて、社長…。私を役員にして下さいます?」  
「!」

相澤と明良が驚いて菜々子を見た。

「菜々子さん!」

「明良さん…ずっとあなたに逆らうようで悪いんだけど…。…やっぱりこの方がいいんじゃないかって…」

明良は不安そうな表情で菜々子をじっと見ている。

「あなたは、私にまで経営の責任が及ぶのを恐れているのよね。私もあなたのサポートさえできればいいから秘書でいいと思っていたけど…。何かあった時はどうせ皆一緒じゃない?ただの秘書だからって、独り責任逃れするのは嫌だわ。」  
「…さすが菜々子ちゃんだね。」

相澤が感心している。明良は視線を菜々子から足元に向けた。

「明良さん…離婚まで考えてくれてたのね。」  
「!」

明良は驚いて菜々子の顔を見た。

「離婚だって!?」

相澤が素っ頓狂な声を出した。

「な、何！？どういう意味？」

何故か相澤が一番うるたえている。

「違うのよ、社長。明良さんね、この会社に万一のことがあったら…離婚して私だけ逃がそうとしているの…。」  
「！！！」

明良はすべてを菜々子に見抜かれて、動揺している。

「離婚届見つけちゃったの…あなたのところだけサインと判があった。」

「！！！」

「最初はびっくりしたけど、あなたの普段の言動から…そういうことじゃないかと思ったの。私が前の事務所を辞めてから、明良さんがぐっすり寝ているところ…見たことないもの。」

菜々子は明良に微笑みながら言った。

「お前…！…そんなことまで考えてたのか！」

相澤が言った。

「社長、悪く思わないでね。会社が倒産したことまで考えるなんて縁起悪いけど、明良さんの今までの経験から悪い方に考える癖があると思う。」

相澤が苦笑した。

「そうだな…。だからお前を副社長にしたんだけど…」  
「？」

明良と菜々子は不思議そうに相澤を見た。

「…今のお前と一緒にだよ。俺は、最初はお前を巻き込みたくなかった。」

「！…先輩…」

「お前はお前で人生があるから、俺と一緒に心中させるのはどうかなってさ。」

明良は驚いた表情で相澤を見ている。

「ちょっとは見直したか？」

相澤はそう言って笑った。明良は下を向いて苦笑した。

「お前は先を見る目がある。少々悲観的だけど、俺が呑気だから一緒になったらちようどいいんじゃないかってね。」

菜々子は、微笑んで下を向いている明良を見た。

「私も仲間に入れて、明良さん。」

「菜々子さん…」

明良は菜々子の顔を見て「ありがとう」と言った。

「言っとくけど、…離婚届はもう破っちゃったわよ。」  
「！」

相澤が笑った。

「よし！これで菜々子ちゃんは専務に決まり！菜々子ちゃん、後で契約書用意するから、サインお願いね。」

「はい。」

「役員会議はこれで終わりだ。副社長室に帰って、2人でキスでもしてくれ。」

「！嫌だわ、社長。」

全員で笑った。

・・・

翌日、菜々子に専務室が用意された。

菜々子は、副社長室と一緒にいいと言ったが、女性社員やアイドル達の話の聞いたりするのに、やはり別に部屋を用意した方がいいだろうということになった。

「…落ち着かないわあ…」

立ったまま辺りを見渡して、菜々子が言った。

「どこが？」

専務室を訪れた明良が不思議そうに言った。

「広すぎるのよ。それも1人きりでずっとここにいなければならないの?」

明良は笑った。

「別にずっといなくていいですよ。レッスンを覗きに行ったり、仕事に同行してあげたり、菜々子さんの思うようにして下さい。」  
「なるほど…」

菜々子は嬉しそうに言った。

「…でも、あなたとの時間…思ったより増えないわね。」

菜々子がそう言うのと明良がそっと近寄って、菜々子に口づけた。

「菜々子ちゃん！」

相澤の声がした。明良と菜々子は慌てて、体を離れた。

「菜々子ちゃんの、秘書兼運転手さんが挨拶したいって。」

「！？…はい、どうぞ…」

ドアが開いて、相澤の後ろから女性が入ってきた。菜々子はその女性を見て、声を上げた。

「マネージャー！」

「菜々子さん！」

2人は思わず手を握り合っている。

明良がまぶしそうに目を細めて微笑んでいる。

「どうして？事務所辞めちゃったの？」



「実は、菜々子さんが事務所を辞められてからすぐに私も辞めたんです。」

「！……どうして……」

「私も潮時だと思っていたんです。しばらく貯金していたお金でゆつくりしていたんですけど、昨日相澤社長からお電話をいただいて……」

菜々子は、相澤に感謝の目を向けた。相澤は親指を立てた。

「是非と、すぐにOKさせていただきました。」

「私もこんなうれしいことはないわ。これからよろしくね。」

手を握りあっている菜々子達を後にして、明良と相澤は専務室を出た。

……

「お前の元マネージャー元気か？」

相澤と一緒に副社長室に入ってきて、明良に尋ねた。

「ええ。カナダで第2の人生を満喫しているようですよ。」

「いいなあ……。俺も社長引退したら、そうしようかなあ……。」

「先輩。」

「ん？」

「僕は……若い頃から、いつも先輩に守られてばかりで……」

「おいおい……いきなりどうした？」

「……菜々子さんのことまで……フォローしてくれて……」

「……やめろって……」

相澤は、もう泣いている明良に背を向けた。

「…これからも迷惑をかけると思いますが、よろしくお願いします。」

「

明良は涙声でそういい、その相澤の背に頭を下げた。

「なんだろうねえ…お前って…ほっとけないっていうか…」

相澤は背を向けたまま言った。

「お前の才能に嫉妬したこともあるけど、そんなことも超えて勝手に体が動いちゃうんだよなあ。いうなれば兄弟みたいなもんだ。」

「…！…先輩…」

明良は驚いた目で相澤を見た。

相澤が振り返った。目が真っ赤になっている。

「まっ…こちらこそよろしく。」

相澤はそう言って明良の肩を叩くと、足早に副社長室を出て行った。明良はまた溢れ出る涙を、指で払った。

（終）

## 覚悟（最終話）（後書き）

最後までお読みいただきありがとうございました！

ちよつと大人になった明良はいかがでしたでしょうか？

次は「アイプロ！」というお話で、更に明良が大人（？）になって登場です。

（ラブラブシーンは減りますが（^^;））

是非、次回もよろしく願いいたします（^^）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9331o/>

---

副社長 北条明良

2011年10月8日05時08分発行